
逃げ道はひとつじゃない

天羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃げ道はひとつじゃない

【Nコード】

N6299V

【作者名】

天羽

【あらすじ】

行儀見習いのはずが花嫁修業？初めて行った祖父母の家はお金持ちで、いきなりそこに住む ことになったからさあ大変。顔が良くて性格が破綻してる婚約者まで出てくるって、嬉しい通り越して恐いんですけど…。

自サイトぷちへぶんにて連載していた作品の転載です。

1 (前書き)

初めましての方、お久しぶりですの方、楽しんでいただけたら幸いです。

1

ある日、お母さんが言った。

「花嫁修業したくない？」

したかったら嘘だろう。無事高校生になれたばかりのあたしが必要あることだとは思えない。

「いえ、全く」

無感情に答えたあたしは、情報垂れ流しのテレビに視線を戻した。土曜日の午後、墮落しきった時間を堪能している娘に何かしら思うところはあるのかもしれないが、突飛なことを言う母ちゃんだ。そういうのは相手を見つけてからするもんでしよう。

しかし、母はめげなかった。

取り上げたりモコンでテレビを消すと、ずるずるあたしの横まで移動してくる。

「早希はおじいちゃんとおばあちゃんに会いたくない？」

「先月会ったじゃん」

確か里帰りで延々電車に揺られた嫌な記憶があるぞ。もう一度行けっただか？ いや、何よりこの会話と花嫁修業云々にどんな脈絡があるって言うの。

娘の怪訝そうな表情に気付いてないのか、お母さんは気持ち悪くなるくらい全開の笑顔をずっと近づけてくる。

「お母さんの方じゃなくて、お父さんの方よ」

あー、父方ってヤツね。そういや、一度も会ったこと無いね、生まれてこの方。

「別に興味ない」

にべもなく言い切ったあたしに、お母さんはそんなことないですよ、と詰め寄ってきた。笑顔の下に必死の形相を隠してる気がするのは、どうしてなんだろう？

こりゃ間違いないかなんか企んでるな。

「花嫁修業となんの関係があるのか、簡潔に説明して下さい」

いちいち回りくどい説明を聞くのが億劫で、単刀直入に切り込んでみたらば：泣き真似を始めるんだもんなあ、相変わらずたち悪っ！家の母親と言うのは弱い女を全面に出して生きてるような人で、まあ世渡りが上手と言うか：しょっちゅう泣いたりへこんだりして同情を引いて何事も思う通りにしちゃうのだ。

お父さんが逆らえないもんだから、家中すっかりそれに馴染んじやって、かくゆうあたしも例外じゃない。

だから、泣くのは反則です。

「実はお父さんの実家って俗に言う旧家なのよ。それでサラリーマン家庭に育ったお母さんじゃ釣り合わないって反対されてあの人実家と縁を切ってくれたのよねえ」

しみじみ過去を振り返り始めるのは結構なんです、何だかあたし嫌な予感がしてきましたよ。

「ところがお父さんて一人息子なのよ」

ほら来た。だんだん花嫁修業と繋がって来たぞ。

「分家は多いけど、やっぱり本家の直系が良いってこの間お電話頂いて」

「お姉ちゃんがいるよ」

先手必勝とばかりに言い継いでやったのに、この人首ふるんだもんな

あ。

「有希は駄目。彼氏がいるから」

「この際別れてもらいましょう！」

「可哀想じゃない」

「あたしは可哀想じゃないのか！」

「だって、早希は離れて寂しい人いないでしょー」

あ、本気で泣き始めちゃった。

しかしね、お母さん。離れて寂しいってアナタあたしをどこへやる気なんですか。

泣きたいのはこっちだっていうの。今度ばかりは必殺泣き落としも通用しないんだからね。

「家族と離れるのは寂しいよ、充分」

これは嘘じゃない。駄目な両親と妹を大事にしてくれないお姉ちゃんだけど、それでも大好きな人達だもん。

「ひどい…！早希はお母さんとおばあちゃんの仲直りの機会を奪うのね」

言うなり号泣ですか…。

派手に泣き崩れながら白状した本当の理由の悲しさに、こっちが号泣したいです。

大事な娘を自分達の和解に使おうなんて、あたしって人間扱いされてないわけ？取引材料？

わかってるのにお母さんに申し訳ない気持ちになっちゃうのは長年培ってきたパブロフの犬的効果のせいなんだろうなあ…。こんなに泣かして言うこと聞いてあげなかったら、お父さんもお姉ちゃんもあたしを責めるんだろうし…。

「わかったよ、お母さんに協力します。」

嫌だけどって言葉はかろうじて飲み込んで、ぽんぽんと肩を叩いてあげるとお母さんは涙に濡れた顔をちよつとだけ上げた。

その捨てられた小動物の様な目と言ったら…逆らわなくてよかったって気にさせる健気さで。

「本当に？」

「本当です」

もう覚悟はできました。煮るなり焼くなり好きにしてください。

「じゃ、早速明日から、あちらにお世話になってね♪」

完全復活して、るるるんでキッチンに消えたお母さんをあたしは呆然と見送った。

さっきの涙はどこやら、今晚の献立なんて心配してる人が自分の母親…。

取り消せないかなー…取り消せないんだろうなー…。

「広いお家だね、お父さん♪」
「そうか？なんか照れるなあ」

褒めてないんで赤くなってあたしを小突くのは止めて下さい。嫌みです。気づいて。

ご立派な日本家屋はゆうに家の三倍はありそうな広さで、この畳が二十枚も敷いてある（待たされて暇だから数えたのよ）座敷だけでリビングとキッチンが入っちゃう。

ここが噂の父の実家である。

日曜日の朝9時にお父さんとここへ来るのが祖父母の指定だったそうだけど、只今9時半現在お二人はまだお出ましにならない。

1時間も電車で揺られて来てやった息子と孫を、延々待たせるのがここん家の家風だってんなら、花嫁修業とやらはするだけ無駄じゃないのかね。こんな常識は世界中探したってまかり通んないはずよ。ってかあたしが通さないね！

「帰る」

唐突に立ち上がったあたしはお父さんを振り返りもせず、縁側に続く襖を力の限り開けた。

失礼を失礼で返すことに躊躇いはない。だけど派手な開閉音を期待したのに、数枚連なってるそれは音もさせずにきっちり一枚分スペースを作っただけだった。

ちっ、大音響でもしたら怒りが伝わってすっきりしたってのに、家まで持ち主と一緒にいけ好かないったら！

「お、落ち着いて早希！そんなことしたら大変なことに：」
「たいした躰ですこと」

慌てふためくお父さんの声に重なるように聞こえたお婆さんの声。妙に気取った神経に障る声の持ち主は、視線をやらなくても正体がわかった。

「お婆あちゃん」

初めて会うのに他人のような気がしないのは（いや、他人じゃないけど…）顔がお父さんそっくりなせい。

光沢のあるアヤメ柄の着物姿で白銀の髪をほつれ一つ無く結い上げた六十くらいの婆あさんは、鈍色の同じく着物姿の老人の後ろから睨むようにあたしを見ている。

何がムカツクって、それが世間一般では綺麗って呼ばれる容貌をしてることだろう。

ええ、うちの父はね、結構格好いいんですよ。あたし全然似なかったけどね…ふんっ。

「お祖母様とお呼びなさい」

高飛車に言った声に絶句した。

お祖母様…今の時代にお祖母様ってあんた…マンガじゃないんだから。

「中に入りなさい」

今度は老人が命令。これがじいさん…こっちもお祖父様と呼ばないと怒るのかな…。

しかし二人揃って高圧的と言うか威圧的と言うか、お父さんこのお家捨てて大正解よ。

「早希」

脱力しきったあたしにお父さんが声をかけてきた。見やれば情けない顔で言う通りにしてくれと訴えかけている。

はいはい、怖いんですね自分の親が。穏便に済ませたいから反抗するなど言いたいんでしょう？了解ここは譲りますよ、その後は知らないけどね。

納得してあたしは黙って踵を返すと、元いた場所に戻った。

礼儀作法なんか無視して胡座でも組みたい気分だけど、それはしない。これ以上躰がなつてないなんて両親を侮辱されるのはまっぴらだ。お父さんもお母さんもきちんとあたしを育ててくれたんだってとこ見せないと申し訳ない。

背筋を伸ばし、正座して畳二枚分前に座った祖父母と正面から視線を合わせる。

火花が出そうな見つめ合いの中、口火を切ったのは深々と頭を垂れたお父さんだった。

「ご無沙汰しております」

聞いたことのない凜と通った声にお祖父ちゃんが鷹揚に頷く。

「元氣そうでなによりです」

返事を返したのはおばあちゃん。

相変わらず笑顔の一つも無かったけれど、表情は大分柔らかくなってる気がした。

そりゃ、久しぶりに会う息子だろうし嬉しかったんだろうけど、いつもその顔してればいいのに。ちょっとは怖さが減るのにさ。

「娘の早希です」

促すようにこちらを見たお父さんに習って、あたしも頭を下げた。そんなことしたくないけど、何となく雰囲気飲まれちゃったよ。情けないな、自分。しっかりしろ、自分。

「今日からお前は風間の跡取りだ。どこに出しても恥ずかしくない教育を受けてもらう。そのつもりで」

うつわあ、偉そー。何様だあ？つーか、前置きなくいきなり？！教育とか何にも聞いてないんですけど？！

言い返してやろうと顔を上げたのに、お父さんに押さえつけられた。いつにないその強い力に、喉まで出かかっていた文句がつかえる。

「よろしくお願いいたします」

離せ！くそ親父、ってか何勝手にお願いしちゃうかなあ？今度こそ異を唱えようとしたのに、絶妙のタイミングでくちばしを突っ込んだのはおばあちゃんだ。

「早希の面倒は私が見ます。あなた方の接触は一切禁じますから、心しておいて下さい」

「親に会うな？！」

馬鹿力を振り切って頭を上げたあたしは、思わず叫んだ。

冗談じゃないわよ！籠の鳥じゃあるまいし、行動の制限まで受け

るなんて聞いてない！

隣を睨むと、お父さんも困惑に顔を曇らせていた。どうやら誰もこの辺のこと、詳しく聞いてなかったらしい。

「短期間で風間家の娘としての礼儀を、覚えなくてはならないのよ？ましてやすぐにも婿を取ろうというのに、今更親もないでしょう」「むこお？！」

聞いてない！全然初耳だよそれ！

どうなってるんだとお父さんを振り返ると、明後日の方向を向いてる。その横顔に流れる冷や汗は：これに関しては知ってたな？！

「そんなの知らない！何で十六で結婚よ！」

「美咲さんには、お話しておきましたよ。よい婿が見つかったので、孫を一人欲しいと」

お母さん！あんた何にも言わなかったじゃない！

犬猫じゃあるまいし、欲しいっていわれて素直に娘差し出してんじゃないわよ！あたしの人生なんだと思ってるの！

「すまないな、早希。きっと幸せになるんだよ」

待て、待て待て待てー！！元はあんたの責任じゃんか！父ちゃん、笑って誤魔化すなー！！

「いいですね、早希。頑張るんですよ」

いいわけあるか！人の人生を大の大人がよってたかって決めるんじゃない！

「いーやーだー!!」

叫び声は虚しく、無駄にでかい家の中にいつまでも響いていた。

3

「どちらへおいでですか？」

まだ玄関にも行き着かないってのに、おじさんの声に止められてしまった。

祖父母の住む、とんでもなく封建的な家に着いて十時間。既に何回言われたかわかんなくなりつつある台詞に、これまた何回ついたかわかんない悪態をついた。

「家へ帰るんですよ、平沢さん」

すっかり覚えてしまった名前を繰り返して、あたしは振り返る。

平沢さんとはここん家の運転手さんだそうで、三十半ばくらいの立派な体躯のお人だ。

お出かけの無い今日はお祖父ちゃんに命じられたとかで、つかず離れずあたしを見張ってる、つまり敵。

「早希さんの家はこちらです。お帰りになる必要は無いと思います
が」

にこりもしないいかつい顔でのたまうと、彼は視線を廊下の奥、あたしに与えられた離れに送った。

「ここはあたしの家じゃありません。止めても無駄」

言いざま庭に続くガラスの引き戸を開け放つと、一瞬反応の遅れて平沢さんを出し抜いて一気に走り出す。

ふふん。何度も脱走を試みていたのはあたしが学習しないお馬鹿

だからじゃない、逃走経路を頭に叩き込んでたからのよ。

離れの窓の外はでっかい犬が放してあるし、出入り口は平沢さんが固めてる。家の中は始終使用人がウロウロしてるし、庭には高い塀が巡らされてる。

唯一安全に脱出できる玄関は正面から出るのは困難だけど、でも庭から駆け抜けられすぐそこで、それには平沢さんの追撃をかわす足がなきゃいけないけど、あたしには平凡な運動神経しかない。

だから、数回目の脱出劇の時こっそり庭に続くガラス窓の鍵を開けといたんだ。八枚全部、見つかって締めてあったらと思ったけど確認したらノーチェック。部屋は広いが縁側を兼ねてる廊下はそんなに広くはない。

抱きしめていたでっかいカバンを投げ捨てて飛び出せば、平沢さんに数秒のロスタイムを作ってもらえる寸法で。作戦は見事大当たりで、裸足なのが気になったけど構わず玄関へ続く小路を駆け抜ける予定だったのに…。

「おっと！」

ぶつかりましたー！この感触は男の人だと思われます！

だって声は頭一個分高いところから、胸板はやたら硬いもん。こんな低音で筋肉質なお姉さんがいたら、イヤよ。

「どこへ行くの？お嬢さん」

「近衛様、申し訳ありませんがお放しにならないで下さい」

問いかけとお願いはほぼ同時。

くっそー！平沢さんに追いつかれたじゃないか！

万力の如く掴んだら放さない筋肉の塊みたいな腕の中、恨みがましく見上げた男は、綺麗だった。ええ、それもむかつくくらいすか

した笑顔の美人！あたしより全然美人とか、腹立つんですけど！

「放してよ！」

女でも…いや女だからこそ、裸足で逃げ出したくなっちゃう美貌を睨み上げた。

「駄目」

簡潔に答えを述べると、そいつはあたしを抱き上げる。ふわりと軽い荷物だとしても言いたげに、容姿とはあまりに不釣り合いな力を以て。

「こらっふざけんな！はーなーせー！」

じたばたと無駄に足掻いてみたけれど、口汚い言葉で牽制してみたけれど、こいつ怯みもしない。

笑顔を絶やすことなく、近衛様つと声をかけてきた平沢さんを振り返る。

「ありがとうございます。代わります」

差し出されたごつい腕が檻に見えるのは、幻覚なのかな？…違う、現実だ…。

最早ここまでと観念したあたしはそつと息を吐き、引き渡される罪人よろしく抵抗を止めた。

負け戦は主義じゃない。男二人から逃げるだけの脚力も体力も無いんだから、次の機会でも伺うのが利口つてもんでしょう。

ところが、男は平沢さんの手を断って、こともあるうか抱いたあたしに耳を寄せるとそれはそれは色っぽく、気色悪い事をいうんだ。

「いや、僕が連れて行く。君が僕の奥さんになる人でしょ？じつくり、親交を深めようね」

あたし、反射的にひっかいちゃったわよ。手近にあった、お綺麗な顔を。これぞ防衛本能のなせる技、だねえ。

見事な四本のみみず腫れをね、血を滲ます勢いでつけちゃったんだから。

だってそりゃそうでしょう。ナーバスになってる幼気な乙女をからかうなんて地雷を踏んだんだから、当然の報いよ。バカにすんじゃないっての。

「嫁はほかで見繕って下さい」

ふくれっ面のまま言い放ったあたしに、それでも笑顔を崩さない男。

……いや、この笑顔なんか底冷えがする。さっきと質が違うぞ…。

「猫は嫌いじゃない。でも野良は躰けないと飼えないなあ」

ぞっとね、しましたよ。背中ににね、いやあな汗、かきました。

怖くて返事なんかできるかっての。この人、目が据わってますけど？まさか、犯罪者だったりしないようねえ？

「急に元気がなくなったね、どうかした？」

…いけしやーしやーと。あんたのせいだって！わかって言うな！じじばもある意味怖かったけど、あの人達にはこんな底知れなさは無い。

この男、相手に抵抗をさせず自分の意のままにする術を知ってい

る、とってもヤバイ人種だ。本能が逃げろと叫んでる。

「……嫁は嫌です。祖父母にも言ったけど聞いてくれません。あなたがおばあちゃん言う所の婿ってのなら、断ってもらえませんか」

なので、とりあえず下手に出てみることにした。負わせた傷のことは、都合良く忘れて。

関わりたくないけど、関わりなきやならない相手のようだし、そんならうまいこと利用して乗り切ろうって算段よ。

だってほら、こんだけの見かけしてて、お祖母ちゃんがイチオシならお金持ちなわけでしょ？年頃のお姉様方をよりどりみどりなんだから、乱暴で口が悪くて頭が悪くて顔は10人並、性格にだって多少難ありなあたしを選ぶ必要性がないよ。

わざわざ野良猫なんて飼わずに、血統書付きをゲットすべきだ。

絶対！

つーわけで、2割良心から、8割自己保身からご忠告申し上げたんですがね。

「うん、そのつもりで来たんだけど、気が変わった。君ならいいよ」

黒いものがにじみ出した笑顔で、こんなこと言うんだよ！

なんで？どこで、そのありがたいお気持ちがひっくり返ったんで？全く覚えがないよ！

「冗談！断りましょう、今すぐ！」

どうして気が変わる？！普通こんな女見たら引くじゃん、てか、引いて！お願い！

あたしの声にならない悲鳴と、憐れな瞳がヤツの更なる興味をそそったのか、数分前より一割り増し（当社比）でご機嫌になるとい

らん説明をくれるんだ。

「お嬢様はたくさん見たけど、動物は初めてで楽しそうじゃない？
女性と暮らすよりペットと暮らす方が快適に決まってるし」

「おまえもかー!!」

誰があたしを責められましょう？

ここへ来てから人権無視され続け、果てはペット扱いだって言う
んだよ？

ええ、ええ、恐怖なんて一瞬で吹き飛びましたよ。手が出て当然、
こんなヤツは成敗されて当然だ！

不安定な体制から繰り出された怒りの鉄拳は、だけど当たること
はなかった。横から伸ばされた平沢さんの手に阻まれちゃったから
力で叶わないことを知って、あたしを捕らえるとはひどいじゃな
いか！ええい、離せ！一発入れなきゃ気が済まないんだ！

振り返りぎっと睨み付けると、平沢さんはなんとも読みがたい表
情で、ふるふる首を横に振っている。

「いい加減になさい」

（これ以上は逆効果ですよ）

あたしにだけ聞こえるように囁かれた言葉の意味はすぐにわかっ
た。

「どうして止めちゃったの？僕たくさんお仕置き考えてたのに」

……………今日始めて、他人に感謝したくなった。

マジ、ありがとー、平沢さん……………。

顔に派手なひっかき傷をつけた男と、引きつっている祖父母を前に、居心地悪い思いで座ってるあたし。

広い座敷に膳がしつらえられ、お食事会なわけだけど、この時間は苦痛極まりない。誰も話すことなく、かと言って箸を付ける雰囲気でもなく、お通夜かつつのよ。

ああ違う、一人だけ薄笑いを浮かべてる奴がいた。不気味な笑顔でお通夜に臨む人はいないやね。

「すまなかったな、近衛君」

暗いお祖父ちゃんの声が沈黙を破った。滲み出てる疲労感はい…あたしのせいだろうな、やっぱ。

「いえ、楽しかったですよ」

おばあちゃんの横、あたしからは斜め前に位置する近衛氏が、マジ楽しそうにこっちに視線をくれる。

…同意を求めないで、お願い。正面からおばあちゃんが睨んでるんだって。

「教育が行き届かなくて、お恥ずかしい限りです」

ため息と共に吐き出されたおばあちゃんの言葉に、奴は首を振る。

「大丈夫ですよ、これからじゃありませんか。一日も早く早希さんが僕の妻となれるよう、一緒に頑張りましょう」

頑張るポイントが間違ってますって、絶対。ついでにその薄ら笑いも間違ってます。

「結婚を止めるって案はどうですか？」

さっきはあっさり却下されたけど、じいちゃんばあちゃんの考えは変わったかもしれないじゃない？手に負えない娘だって自覚するとかして。疲労困憊してる姿を見てたらそんな気がしてきたのよねえ。

ところが、意外にも敵は冷静だった。

「お前は黙っていなさい」

むつつり、不機嫌丸出しでお祖父ちゃんが唸るように言う。

ちっ駄目か。

聞く耳持っちゃしない石頭は、ひと睨みであたしを牽制すると、近衛氏に視線を向ける。

「私たちも今日始めてコレに会ったのだが：正直、数時間で疲れた。これ程手に負えんとは。それでも婿に来てくれるかね？」

「はい、是非に」

言いたいこと言ってくれるじゃないのよ、疲れたのはこっちだったの。どれだけ逃げ出すのに手間暇かけたと思ってるわけ？最後はうまくいったのに、そのそいつに台無しにされるしさ、おっかない思いもするし、踏んだり蹴ったりよ。人がむかついてるってのに、あっちはヤツの愛想の良い返事でいきなり和んじやって食事始めちゃうし、それ以前に当事者の一人であるあたしの意見は即却下だし。

…あれ？無視されてる？おっ、もしかしてチャンス到来？

盛り上がってる皆さんを一回り見回してみたけど、誰もあたしに注意払ってる人はいなかった。

むしろすっかりいいないもの扱いで、まあまあ、なんて決まり文句付きで晩酌なんかしちゃってて。

近衛氏はともかく、お祖父ちゃんは結構年いってる上の飲酒で、お祖母ちゃんも上機嫌で少しだけ、ってな具合に杯開けちゃってて、もうこれは逃げてくれと言わんばかりに、油断しまくりデスヨ。ははは。

平沢さんの動向が気になるころではあったけど、あたしは気にせず再度脱出計画を練り始める。

千載一遇のチャンス、無駄にしちゃバチが当たりますから。

ここから一番近いトイレは玄関付近で、台所はその奥に位置していたはず。料理を作ったり運んだりしてるんだけど、絶えず来るとて訳じゃないから、次のお給仕に合わせてトイレに立てば、廊下に人気は無い。

決意も新たに本日最後になるであろう逃走に、あたしは密かに闘志を燃やした。

ふふん、人を肴にお酒が飲めるのも後僅かだからね。せいぜい酔っぱらうがいい。ジリジリしながら適当に料理を摘み、周り具合を確かめるあたしには果てしなく長い時間が過ぎ、やっとその時は来た。

お給仕さんが揚げたてのお天ぷらを運んで来た少し後、仄かに紅潮した祖父母の顔を流し見て決断。いける。

さり気なく立ち上がり、ちょっぴり痺れた足を励ましながら障子の前までにじにじ移動した。

背後からかかる声が無いか、体が廊下に出きっちゃうまで心配で

仕方なかったのだけど、クリア。

音もさせずに締め切った障子を確認した時は小躍りしたいくらい嬉しかったけど、落ち着いて、あたし。先はまだ長いんだから。浮かれてる場合じゃない。

不安要素だった平沢さんの姿は庭先で発見した。こちらに背を向ける形で犬に餌をやっている。

怖いくらいラッキー。しめしめってなもんで、音をさせない早足でガラス張りの廊下を一気に抜けた。

遠くで聞こえる使用人さん達の話し声はバロメーター。今なら安全ってね。

そうよ、これ！こんな感じを待ってたの！やかましい犬の声やら、冷や汗が流れ落ちる平沢さんとの掛け合いなんていらない。

静かに、こっそり、腕のいい泥棒さんの如く誰にも気付かれずに抜け出す。コレが脱走の醍醐味よ。

…なんか最初の趣旨と変わってきてるけど、まあいいか。とにかく逃げろ！

軽い引き戸を最新の注意で開け放ったあたしは、街頭の明かりが眩しい夜の道を駆け出した。

気付いたのは、バス停についてから。

ぬかったわ、近衛氏に会うからって着替えさせられた時、当然だけれど財布と携帯の入ってたジーンズ脱いじゃったんだよ。

これじゃ、どうにもできない。

虚しく行き過ぎるバスを見送った後、歩道にへたり込んだあたしは満天の星空を見上げた。

疲れる一日だったなあ。せつかくの日曜だったのに、してたことと言ったら逃亡計画練るだけだった。ジジババはろくなもんじゃないし、顔は天使みたいなのに性格は悪魔みたいな男に会うし。

そんな下らない感傷に浸ってるから、あたしは迫り来る追っ手に気付かなかったんだ。

「もう、気が済んだ？」

星を隠すように顔を覗かせたのは言わずと知れた近衛氏。

そりゃあもう、心臓止まるくらいに驚いちゃったんだけど、参ってた精神は体におっつかない。

「済むわけないじゃん」

淡々と返すと、でっかい体を押しつけるように立ち上がる。

本日の業務は終了しましたってね。追いつめられたんじゃない勝ち目はない。勝負は明日に持ち越すわよ。

「帰るの？」

意外だとばかりに近衛氏は問いながら、それでも引き返すあたしの背中を追ってきた。

「さっきの終バス。歩いて帰るには遅過ぎんの」

「常識はあるんだね」

朗らかに言うんじゃない。あんたら金持ち連中の常識の方がよっぽど疑わしいわ。

言い返すのも面倒で、振り返りもせず、もくもくと歩く。静まりかえった住宅街は物珍しい物も無く退屈で、あたしは空を振り仰ぎながら進んだ。

月のない夜の星空は澄んでて綺麗で、胸に染みる。

せめて家族の声が聞けたら元気が出るのに。まさか会うな、なんて言われると思わなかったから、普通に家を出てきちゃったんだよね。

それを聞いたみんながどう思ってるのか知りたい。少しは可哀相だと思ってくれてるのかな？ちゃんと、あたしのこと大切？

携帯がないところを改めて後悔して、ふと背後の近衛氏の存在を思い出した。

「ねえ携帯ない？」

振り返ると怪訝そうに、それでも胸ポケットを探って小さな通信機器は差し出される。

不思議な機械、これ1つで会いたい人達に繋がる。

「借りていい？」

それを指さすと、近衛氏は初めて見せる邪気のない笑顔で頷いた。

「どうぞ」

「ありがとう」

礼を言って取り上げた携帯を開き、普段はほとんど押すことのないボタンを、間違えないよう丁寧に触れていく。

耳に付けると短い発信音の後、コールが始まった。

自分の家にかけるのに緊張するって初めてで、ちよつと笑う。ほとんど待つことなく途切れたコールが、お姉ちゃんの声と代わった。

「はい、風間です！」

勢い込んで出たって感じにちよつとびっくり。彼氏からの電話でも待ってたのかな？ そうだったら、出たのがあたしで怒るんだろうなあ。

「…ごめん、タイミング悪かった？」

「やっぱり！ 早希ね、どうしてもっと早く電話よこさないのよ！」

「は？」

「は？ じゃない！ お父さんに聞いて心配してたんだから！！」

マジで心配してたらしい剣幕のお姉ちゃんに、こっちの方がびっくりだ。

長いこと姉妹やってきたけど、本気で心配されたのなんか初めて。まして相手は『一人っ子がよかった』ってことあるごとに言ってる人だよ？ たった一日、それも行き先もはっきりしてるのに、悪い物でも食べたのかな。

「ちよつと、待って！」

嬉しいやら照れくさいやらで返事もできないでいると、あちらで

は何やらめ事がおこって、

「早希！ごめんねえ」

今度は涙声のお母さん。こりゃ電話の奪い合いをやってたわけだ。

「落ち着いて、大丈夫？」

条件反射で母親をなだめにかかる、あなたこそって聞かれちゃった。いつもの嘘泣きじゃない。お母さん、本気で泣いてる。

「知らなかったの、そっちに行ったら会うの禁止されちゃうなんて。今までお姉ちゃんと二人でお父さんをつるし上げていたのよっ」

何度も何度も謝って、収集つかなくなってるお母さんにつられてあたしまで涙が出そうだった。

よかった。みんなあたしのこと見捨ててなかったんだね。ちゃんと、心配されてた。

「早希、すまなかったな」

「お父さん…」

お祖父ちゃん達がいるところじゃ聞けなかった、申し訳なさそうな声。

「お父さん毎日でもそっちに行って、きっと会えるようにするから、ちよつとの間我慢してくれ。あの2人を今日止めるのは無理だったんでな、何、落ち着けば息子の話だ、聞いてくれるさ」

苦笑混じりの台詞は楽天的なのに、ちっともそう聞こえなかった。

うん、わかるよお父さん。あなたの両親は人の話を理解しよう
しない。だからあたしも実力行使に出たんだし。

「待ってるね」

こっちも気合い入れ直して脱出計画練るしってのは、黙ってお
いた。余計な心配させちゃいけなから。

それから代わる代わる電話口で励ましてくれる家族に元氣をも
らって、名残り惜しみつつもあたしは電話を切ったのだ。

かける前のへこみ具合が嘘みたいになんか気分がいい。知らず笑っ
ちゃうくらいには。

「元氣が出たね」

携帯を返したあたしに、近衛氏が微笑んだ。

「お陰様で。明日からまた全力で逃げるからね」

にやりと口元を歪めると、それでこそと返ってくる。

「活きのいい獲物ほど捕まえがいがあある」

「…あんだ、獵師？」

そう不覚はとらないわよ。根性は庶民の方が上なんだからね。
感傷に浸る必要の無くなったあたしは空を見上げることなく、真
っ直ぐ前を向いてバトルフィールドへ戻る道を歩き始める。

明日からの第二戦、覚悟しといてよ！

月曜日、制服を着込んだあたしは上機嫌で朝食の用意された座敷へ入った。

既に食事を終えて、お茶をすすっている二人にも陽気な挨拶をプレゼント。

これから数時間、そのすまし顔を見なくて済むと思えば寛大になれるってものよ。学校行くのが嬉しいなんて一生に数えるほどしかない、考えれば貴重よね。

「それはなんです」

そんな気分をぶち破るお祖母ちゃんの嫌そうな声に、膳の前に座ろうとしていたあたしは中腰のまま止まってしまった。

すめられた視線を辿れば、どうやら注目の物は制服のようで。でもま、一応。

「それって何？」

「その制服ですよ」

はいはい。わかっちゃいたけどやっぱりこれのことなわけね。

短いスカートとブラウスにネクタイを見ながら、あたしは顔をしめる。

やっぱりスカートの長さかなー、お母さんにもさんざん言われたもんね。中が見えるって。でも、膝上15センチくらい、

「みんな、やってんだけどねえ」

裾を摘んで見やると、お祖母ちゃんは何のことかわからないって

顔をして、それから片方の眉をひょいと上げた。

「そんなものはどうでもよろしい。学校に行かなくていいと、言っているんです」

はい？まさかやめてまで花嫁修業とやらをしろって言うわけ？冗談じゃない、今は平成だよ？明治じゃない。

「女だって、ある程度教養は必要でしょ」

わかんない訳じゃあるまいと、その顔を覗き込んでやるとお祖母ちゃんはお茶をすすりながらすまし顔でのたまった。

「転校するんです。あちらの校風は風間の娘にふさわしく…」

「ちょっと待った！」

一瞬にして怒りをMAXまで持って行かれたあたしは、まだ何か言いたそうなお祖母ちゃんを手で制す。

「学校へ行くのも、それをどこって決めるのもあたしだよ。勘違いしないで」

「早希、なんて口をきくんだ」

怒りを内包した声でお祖父ちゃんからの横やりが入るけど無視。こっちはマジ切れしてるんで。

「人の話にくちばしつっこまないで。今お祖母ちゃんと話してるの、見えない？」

口調は静かに、けど二人を黙らせるだけの眼力を込めて睨みつけ

たあたしは、連中がおとなしくなったのを確認して言葉を継いだ。

「昨日から人の意見、全く無視してるじゃない？百歩譲ってこの家に合わす努力はするけど、学校と結婚はあたしがすることなんだよ。これだけは絶対2人の言いなりにはなんないから。よく覚ええてくれる？」

びっと宣言したあたしにしばらく呆然と眺めてた二人だけど、いち早く正気付いたお祖母ちゃんが顔をひきつらせて睨み返してきた。

「生活の面倒を見てもらって、学費さえ親ががりのあなたに選ぶ権利などないんですよ。結婚にしても同じ事、少しは風間の娘である自覚を持ちなさい」

吐き捨てるように言ったお祖母ちゃんに、あたしはニヤリと笑った。

ありがたいこと言ってくれるじゃない。それこそ、こちらの思うつぽ。

「ごもつとも、学費は親がかりです。嫌なら家に帰してよ、両親は交換条件なしで娘を養ってくれますんで。も一つ、風間風間うるさいけどこの家がなんぼのもんよ。お金持ちでなくても、家柄なくても生きていけるっつーの」

ぐうの音もでなかうに。

昨夜から決めてたんだ、この二人には1度家族の定義ってヤツをじっくり考えてもらおうってね。

話し合ったり、支え合うのが家族でしょう？そりゃ年長者は尊敬するし両親にも敬意は払うけど、自分を殺してまで尽くさなきゃいけない法はない。

時代の流れで世間はこんな風潮に変わったって事、納得してもらわなきゃ一緒には住めないよ。

時代錯誤な上流階級の習慣は、徹底的にあたしにあわないんだから。

「…転校も結婚も、そんなに嫌か」

しばらく考え込んでたお祖父ちゃんが呟くように言った。

声に力がないのは、少しはわかってくれたって証拠？

「転校は絶対いや。公立だけどこれでも一生懸命勉強して入ったんだから、相応しくないなんて下らない理由で辞めたくないの」

あたしはそこで言葉を切ると、ふっと思いついてお祖父ちゃんの隣まで歩いていき、座り込む。

深い皺も、見事な白髪も、意外に優しそうな光を宿す瞳もよく見える近さ。

そう、大事な話をするならこの距離の方がいい。

「家族になるんでしょう？あたしも頑張るから、結婚もできるだけ早くするように努力する、お祖父ちゃんを選んだ相手から選べるようにお見合いでもなんでもするからさ、だから決定しちゃうのはまだやめよう？」

わかってっと思いを込めて、膝をつきあわせ話した声は届いたと思う。

だって、お祖父ちゃん表情、ちょっと緩んでるから。

「だめ、かな？」

期待を込めて、ちょっとカワイコぶった上目遣いで見上げたりしたらどうだろう。更に効果倍増かな？

「近衛君の事はまあアレだが、学校は早希の好きにきなさい」

苦笑いだけど、ちゃんと親愛の情が籠もってるお祖父ちゃんを、初めて見ちゃった。そんな風にも笑えるんじゃない。これなら普通の祖父と孫に見えるね、お祖父ちゃん。

いっぱい感謝とわかってもらえた喜びを込めて、年の割に逞しい体にあたしが抱きついたのと、ヒステリックなお祖母ちゃんの叫び声が聞こえたのはほぼ同時。

「あなたっ！早希は私に一任して下さいるお約束じゃありませんか！」

振り返ると、そこに鬼ババがいる。

青筋怖いって、血管切れるよお祖母ちゃん！

あまりの剣幕に一瞬ビビってたらしいお祖父ちゃんも、詰め寄られて世帯主のプライドが疼いたのか、顔を強ばらせると、低い声で一喝した。

「学校などどこでもかまわんだらう。すぐにも婿を取らうという娘に教師の教育は必要ない。お前の気に入るよう教え込んだらいいじゃないか」

いや、お祖父ちゃん…それはそれでイヤ。鬼ババじゃんこの人、殺されるって。

「でも…」

「私の決定だ、本人の希望でもある。文句はきかん」

言い募ろうとするお祖母ちゃんに話しの終了を申し渡して、お祖父ちゃんはまだしがみついてるあたしを見下ろした。
いたずらっぽく笑って、ね。

「学校へ送ってやる。支度しなさい」

「はい！」

飛び上がるように立ち上がり、カバンを取りに行こうとしたあたしの後に何故かお祖父ちゃんもついてきていた。
なんでって視線だけで問うと、眉を寄せてね。

「あれは、うるさくてかなわん」

だって。あはは！怖かったんだね、鬼ババが。うんわかる、その気持ち痛いほど！

「ご飯食べ損ねちゃった。コンビニ寄ってね」

「ああ、平沢に頼んでやろう」

秘密を共有して、少しだけど本音で会話して、こっそり共犯者の笑みなんか交わしちゃって。

お祖父ちゃんとあたしはちょっぴり仲良くなった。

「やり直し」

またですかあ？もう勘弁してよお。

汗だくになりながら結んだ帯を恨めしげに見つめて、あたしはその複雑に入り組んだ布を解きにかかった。

帰宅から一時間、ぶっ通しで着付けの練習ってどうよ？それもお太鼓ならともかく、成人式でおねーさんたちが背中に背負ってるような複雑な帯結びが、いきなりできるかっての。

「お祖母ちゃん、休憩…」

「それも、やり直しです」

「はい？」

最後まで言わせることなく駄目を出したお祖母ちゃんは一瞥をくれてから盛大なため息をついた。

「お祖母様とお言いなさい。初対面で注意したと言うのに、全く直っていないじゃありませんか」

あ、まだ覚えてたのね。あれ以来一度も言われないから諦めたんかと思ってた。

「へいへい」

「返事は『はい』！」

…鬼ババめ。

「はい」

「伸ばさない！」

「はい！」

「どうなの？　どうなのよ、これ！」

びしっと正座して下から睨み上げられながら、あたしは首を竦めた。

覚えが悪いのは認めるけど、バカだし言葉遣いもなってないけど、もうちょっと優しくしてよー。可愛い孫じゃないの？

「早くなさい」

血縁関係を疑いたくなりながら、固く締まった布地を解く為あたしはお祖母ちゃんの厳しい視線から目をそらした。

誰だ、こんなしつかり結んだヤツは！　くう…。

「奥様、お客様がお見えです」

そんな時、背後の障子から、お手伝いさんの声。それこそ、天の助け。

しかし、ちょっとびっくりしちゃったぞ…。集中してたから、人の気配感じなかったし。もしかして、忍者？

「誰です？」

居住まいを崩すことなく声だけ投げかけたお祖母ちゃんに、近衛様ですと簡潔な返答が戻る。

また来たんかいあの人は。まだ五時くらいでしょうに、仕事しろよ、不真面目社会人。

「こちらでは、いけませんね」

言葉を切ったお祖母ちゃんは、帯の解けかけた着物で立ちんぼしてるあたしを見て首を振ると、奥へ通すように告げた。

「その格好を何とかして、あなたもいらっしゃい」

そんな諦めの表情で見ないでよ、こっちもいっぱいいいなんだからさ。

お祖母ちゃんが部屋を出たのを確認して、あたしは畳みにへたり込む。

何しに来たんだか知らないけど、とりあえず近衛氏に感謝だね。立ちっぱなしで足は痛いし、腕はもう上がんないくらいパンパンだったから。

だからって、会いたくはないけど。ここ、別問題だから。

とはいえ、窮屈な着物とおさらばできるのは嬉しいから、さっさとジーンズとTシャツに着替える。

その後は内心を表す動きで、のろのろ客間になってる奥座敷に移動してだらっと畳に座り込んで。

すぐに用意されたお茶に手を伸ばしてお祖母ちゃんに嫌な顔されたけど、あの人にはそんなことより服装と態度の方が気に障ったみたい。

しょうがないでしょ、こんな婚約認めてないし、上品な服なんて持っていないんだから。

それに見てみなくて、お祖父ちゃんも近衛氏でさえも笑顔なんだよ？ 気にすることないない、これくらい。

ところがだ。ヤツは寒い笑顔で、言っちゃうの。

「これから、洋服を買いに行きませんか？」

鼻歌でも出ようって勢いで、可愛い和菓子に口を運んであたしの手はぴたりと止まったね。

あゝ、そう。気にしてる訳ね、あんたも。これを。

「もう店閉まるよ」

「大丈夫ですよ。知り合いのところですから」

むかつきを体全体で表してやったのに、近衛氏の鉄壁の笑みは崩れることはなく。

つかこの人あたしと二人の時と様子違いますか？悪魔はどうした！なんだ、その猫かぶり！

「そうして頂きなさい。その格好は見るに耐えません」

じゃあ、見んな！の声を抑えることができたのは、ひとえにお祖父ちゃんのお目配せのおかげ。逆撫でるなって渋い顔で訴えてるんだ。

「食事もご馳走してくれるそう。楽しめなさい」

えーこの人ですかあ？でも、ちょっと待って。ここで脱出すればこれから予定されていたであろうお祖母ちゃんの特訓からは解放されるわけじゃない、あれ、もしかして。

答えを求めて送った視線の先で、お祖父ちゃんがぎこちなく難しい表情を作ってる。

ああ、そうか。朝言い切った手前、自分では助けられないけど、近衛氏呼んでくれたんだね。嬉しいけど、悲しいよ、お祖父ちゃん。あたし、この男が本気で苦手なんだよ。

しかし、好意を無にするのもなんなんで、本音言っちゃえばこれ

以上お祖母ちゃんに付き合うのは無理なんで、あたしは素直に頷く
とこにした。

究極の選択だけど、今回は仕方ない。

「では、早速参りましょうか」

ニタリとしか表現しようのない笑顔を見た時、自分の決断をちょ
っと後悔しちゃったのは致し方ないはずだ。

逃がしてもらったんだか、捕まったんだかよくわからない状況のまま、無駄に大きい家を後にしたあたしは近衛氏の運転する車で幹線道路に出た。

丁度渋滞時間だから、イヤでも続く二人っきりの長いドライブ。そう言えば、レストランで二時間一緒にいられない男とは付き合えないって雑誌に書いてあったって友達と話したんだけど、ドライブはどうなの？完全密室だけど。

周囲の雑音さえない分、こっちの方がきつい気がするぞ。

「運転手付きなのかと思った」

沈黙は耐えられないから、乗り込んだ時から気になってることを聞いてみる。

平沢さんみたいな人を、この人だって雇ってるだろうに。っていうか、そうじゃなきゃあの2人が、婿だなんだの候補にしない気がするんだ。

だけど近衛氏は正面に視線を向けたまま、さらっと言う。

「僕にそんなに稼ぎはないよ」

「…………へえー」

「信じてないね」

疑い一杯で見てたのに気付いたのか、こちらに向き直った近衛氏はニヤリと笑う。

「近衛家で雇ってる運転手はいるけどね、僕はいない」

「…それ、いるってことでしょ」

「でも僕専用ってわけじゃないよ」

「：確かに」

ま、嘘ではないけど何か判然としないなあ。穿った見方が身についちちゃった？

素直に物事がとらえられなくなるのは問題な気がしたけど、無視。頭っから信じたらバカを見るのがお金持ちの 言うことな気がする。ので。数日でそう学んだんだ。

なんで、流して次の疑問へ。

「どこに勤めてるの？」

今日の訪問時間は、会社勤めとしたら早退コースでしょう。

「親の会社」

「ああ、やっぱ、おぼっちゃんかあ」

そんな気はしたんだけど、改めて納得したあたしはポンと手を打った。どうりで、時間は自由になるわけだね。しかもあの2人がわざわざ婿にと推薦するんだから、小さい会社じゃないでしょう。

鼻で笑ってそう言っていると、

「君だってお嬢さんじゃない」

動き出した車の波に乗りながら、近衛氏は呆れ顔。

状況だけ見るとね、あんな大きな家に住んでお手伝いさんやら運転手やらごろごろしてたらお嬢様かも知れないけど、なにせ”にわか”なもんで。生まれついでるの皆さんとは、育ちも自覚も違うんだ。

「会長と和解したんだね」

ところがそう言ってやろうと思っているところで、近衛氏は急に話題を変え、ちらっとこっちを見た表情はやけに嬉しそうなもの。

会長って、きつとおじいちゃんだよな？なんでそれが、貴女の喜びに繋がるわけ？

「和解って言うか、別にケンカしてたんじゃないけど」

「じゃあ、うち解けた？」

「そんなところ。仲良しになったの」

ケンカするほどお互いを知らないし、ちょっと身内らしくなったというかね。普通の祖父と孫っぽくはなった、多分。でも、なんで。

「お祖父ちゃんとあたしが仲良くなると、近衛氏が嬉しいの？」

あたし達の仲は、彼にはあんまり関係ない気がするんだけど。

怪訝な顔して探るように送った視線の先で、近衛氏はうん、と頷いた。

「あの人はすごくいい人だからね。言わないけど孫と会うの楽しみにしてたし」

「いい人なのはわかるけど、本当に楽しみにしてた？」

初対面では仏頂面してたよ。その後もそう見えなかったですが？
顰めた顔でそう問えば、近衛氏は苦笑している。

「君のお父さんの件があったから、素直になれないんだ。自分のどこが悪くて息子が出て行ったかわかってないみたいだから」

「王様みたいな人だもんねえ」

この台詞には、思わず頷いてしまった。確かに会長って会社で一番偉いんだし、家でも一応お祖母ちゃんより偉いし、反省と妥協からほど遠いところにいるわけだ。それが急に従順だった息子（今の様子からとても反抗的には見えない）に家出され、初めて会う孫はお嬢様にあるまじき言動と行動が常の、反抗的娘じゃ対応に困るね。なるほど、それでこっちから歩み寄った途端、態度が軟化したのか。どう付き合えばいいのか、突破口を見つけてご機嫌でしたと。

……なんて扱いにくい、じいちゃんなんだか：

「だから、僕は君の婿養子の話を引き受けたんだよ。少しでも会長を安心させたくて」

「すいません、その理屈がわかりません」

胸張って威張ってるけど、あんたが婿に来るとお祖父ちゃんにいいことあるんかい。

当人無視して自己完結して貰っては困ると、横顔を睨むけど淡々と話しは続くわけ。

「お父さんの様に逃げられないよう、早く婿を取って孫を手にも、うまくいったらひ孫も手に入れたって言うのが会長の願いだから。僕なら顔もいいし、大抵の女性には結婚を申し込まれるほどの家柄だし、君も気に入って家にいてくれるだろうと任せられたんだ」

「性格悪いんで却下です」

自分で自分を褒めるな！あんた○森選手か。

顔も見ることない女の婚約者になろうなんて、どんなバカかと思ったら本物だよ、本物の大バカだ！お祖父ちゃん喜ばせるためだけに、大した献身ですこと！

むかついたんで、怒りも露わに切り捨てたってのに。

「君にその権利はないんだよ」

ニヤリとヤツは振り向いて、根拠のないセリフであたしを黙らせた。

のろのろと動いていた車が、渋滞の波を抜ける。

言いっぱなしで運転に集中しちゃった近衛氏に、効果的な反論はないものかとあたしは歯がみしながら考えるけど、名案は浮かばず。何故だ、何故こいつをぎゃふんと言わせられる名言を思いつけないんだっ！

で、こんなジレンマに全く気付くこと無い敵は、楽しそうに聞いている。

「今朝、できるだけ早く結婚する、見合いもするって言ったんだってね」

「一つ抜けてる。あんたとの結婚だけは、辞めてくれとも言った」

都合良く主文を抜くんじゃない。そこ一番重要なんだから。

「僕以上の相手は見つけられないよ」

「その自信はどっから来るんだ!」

「三男で、君の祖父母との折り合いもよく、動物好きなんていないって」

「動物って、あたし?!」

「うん」

その爽やかな笑顔をやめろー!

あくまでペット扱いを辞めない男が、どうして最適の男なんて思えるのかな。いっぺんその腐れた頭の中を見せてみる。

「絶対やだ、あんただけはやだ。強制するなら逃げてやる」

そう、当初の目的はそこだったのよ。お祖父ちゃんとちょっと仲良くなって忘れてた。

握り拳を固めて、ギンギンに目を輝かせて新たな決意に燃えちゃったあたしは、もう一つ大事なことを忘れてたんだけど。

「どうぞ、止めないよ。地の果てまでも追いつめられたいなら構わない」

そう。近衛氏は悪魔だったんです…。こんな台詞を鼻歌交じりに楽しそうに言えちゃうくらいには。

ええい、ここで負けてどうする！

「お祖父ちゃんに直訴する」

せつかくできた友好関係、使わずになんとする。

「今日の事、会長に頼まれたんだよ。僕の事をよく知ればきつとイヤだとは言わなくなるって」

薄闇に輝く夜の光がなんと目に染みることか…。お祖父ちゃんとはほんのちよっとしか分かり合えてなかったのね。お祖母ちゃんから助けてくれたんじゃないんだ…。そうか。

「わかった。自力で逃げる！…そうだ、いっそお父さん達みたいに駆け落ちするとか」

これは我ながらいい考え。別の相手を見つけちゃえば口出ししよ

うもないし、ひ孫もおまけに付けちゃおう！

しかし、運転の合間にこちらを流し見た近衛氏の瞳は、とっても怪しく光ってた。

それは楽しげに、獲物を追いつめたハンターの如く。やばい、やばいやばいっ。

「相手がいないでしょ？それとも既成事実こそが大事だって言うなら、これから作る？僕は全然構わないよ、ほら」

そうして指さされた先にある高級ホテル。随分都合良く出てくるじゃない、あんたまさか目指して走ってたんじゃないでしょうね？！いや、そんなことより貞操の危機！

「既成事実はお断りです、マジ勘弁して」

その目を見てると冗談とは思えなくて、あたしは本気で怯えて辞退させて頂いた。

「この程度で怯える人が滅多なことは言うもんじゃないよ」

諭すように言うくせに、どうして目は底光りしたままなのよお。運転するために前向いてなきゃ、怖くて一緒にいられないくらいじゃない。

「じゃあ、おとなしく買い物に行こうね」

「…はい」

か・な・り、不本意ながら同意して、平和な街並みに視線を移したあたしは大きなため息をつくしかない。

あの屋敷から逃げるより、こいつから逃げる方が大仕事になりそ

う。

そう、諦めた訳じゃない。だだの休戦なんだから。あくまでね。

「そうだ、知ってる？男が女に服を送るのはそれを脱がせるためだ
って」

なんだ、その使い古された話は。つか、観察するようにこちらを伺い見るの辞めて下さい、お願い…。

逃げるよ、絶対に逃げるんだから！

………逃げるものほど追いたくなるって、ホント？

「もういないから」

やっこの思いで店から出たあたしは、すっかり疲労困憊していた。なんだって服一枚買うだけで、あんな目に会わなきゃなんないのか…。

フォーマルしか置いてないような高級店に連れて行かれて、どこに着てくんだよってなワインレッドの膝丈のワンピースを選ぶまで、いろんな意味で最悪だった。

口調は丁寧だけど、あからさまにあんたなんか似合うもんかって視線をくれる店員と、頬を引き攣らせてのやりとり、その上近衛氏の好みまで考慮させられて、もう限界。これ以上は勘弁して下さい。

「駄目だよ、普段着がないでしょ？」

しかし、がちり二の腕を掴んだ悪魔は、口調とは正反対の強引さで次の店へとあたしを引っ張る。

同じ通り沿いに何軒か並ぶ店には、カジュアルな雰囲気のものもいくつかあったけど、こいつに払わせた金額と、精神的苦痛を考えると、首を縦に振ることはできない。

「ゼロの数が拷問なんだって」

庶民の感覚との格差を考えてよねって見上げると、近衛氏はこちらにポケットから出したカードをあたしに差し出して見せた。

「会長から預かってきてるんだ」

促されて黒く光るカードに型押しされた文字を読むと”SAKKI KAZAMA”って読めるねえ。へえ、未成年でショッピングカード持ってたんだ。ふーん。

「君が来てくれるってわかって大至急作らせた君名義のカードらし

いよ」

人の心を読んだかのような近衛氏の返答に、適当に頷いてから首を傾げる。

お祖父ちゃんが本当に孫を楽しみに待ってた証拠としては嬉しいけど、高校生にカードって必要？現金渡しのお小遣いを適当額、で良くない？

「使えないよ。あたしのお金じゃないし」

だから必要ないって、手を振ると、

「でも君の持つてる服じゃ弘子さんが納得しない」

とまあ、腹の立つお答えた。

確かに：お祖母ちゃんはおからさまに眉をひそめてたよね、普通の女子高生らしい私服に。けど、人には分相応ってものがあって、あたしに高級服なんて絶対必要ない。

そう主張したんだけどねえ。

「2人が納得すればそれでいいんだ。君がどう考えているかは、この際問題じゃないんだよ」

と、明らかな作り笑いで切り捨てられた。

つまるところ、誰1人あたしの意見を聞いてくれる人はいないってね。お人形さんですか、あんた方が手に入れたのは。

これ以上の口論は無駄だと諦めモードに入ってたわたしを有無を言わせず引っ張って、近衛氏が入った店はさっきの所より数段気楽な雰囲気の流れていた。

店員さんも若いし、お客さんも割と年が近そうだし。いらっしやいませと迎えてくれた笑顔にも、裏がないのがいい。

ただ、安っぽい格好してるのは、あたし一人だけだね。

「ようこそお越し下さいました、近衛様」

近づいてきた妙齡の女性に、人の意見も聞かずに注文を伝えた近衛氏は、ずんずん店の奥に入っていく。

そこにはレジの裏の奥まった場所で、数脚の椅子と、でっかいフイッティングルームがあり、なにやら一般のお客さんは案内されなきゃ通してもらえない空気が漂っている。

勝手に入っているのかと内心びくびくしつつ、少なくとも自己主張くらいはしてみることにして、さっさと椅子に座り込んだ男をひと睨み。

「ちょっと、ちょっとー、あたしの希望とかは受付不可なわけ？」

ふんぞり返った近衛氏は、しげしげとあたしの服装を見た後、にっこり笑ってのたまうのです。

「僕のセンスが疑われるのは、お断り」

「!!!!!!」

声にならないってこうゆう時使うんだ…。

人のセンスを正面切って批判するって、あんたデザイナーかなんかか?!これだって、安物かも知れないけど、最新の流行り物を上手く組み合わせて着てるんだぞー!!!

「こちらへどうぞ、お嬢様」

酸欠の金魚みたいになってたあたしを無視して、数枚の服を抱えた店員さんがフイッティングルームのカーテンを開ける。

大人2人が余裕で入れそうなそこにチラリと視線をやったものの、どうしても一言いわなきゃ気が済まなかったあたしは、再び近衛氏に向き直った。

一番効果的にこいつを攻撃しなくっちゃ、ぐうの音も出ないくらい確実に!

考え込んでいると小さなため息が聞こえて、天使の微笑みをした悪魔が小首を傾げる。

「一緒に入らなきゃ試着できない?」

店員さんが小さく悲鳴を上げたの、聞こえたから。中にはウラヤマシーって声も。

じゃあ代われ！今すぐあたしと代わってくれ！！

慎重さが仇になって先に反撃を喰らってしまった分、更に深刻なダメージを受けちゃったあたしが固まってる、彼がやれやれって腰を浮かせる。

「じゃあ、行こうか？」

「っうわー！！いい、1人、1人がいいです！むしろ1人で、かなり1人で、絶対1人で！！」

ホントにやる、こいつは冗談と本気の区別がないんだから、マジでやる。

目の前が警告色一色になったあたしは、ひったくるように店員さんから服を受け取ると、唯一の安全地帯に駆け込んだ。

分厚いカーテンを閉めると生まれる密室が、なんと心休まることか。あいつがいない場所は、すごく素敵。

バクバクなってる心臓をなだめるように深呼吸していると、むかつくため押しが外から飛んできましたよ。

「早く出てこない、踏み込むからね」

悪魔の囁きに手足が信じられないくらいの素早さで動いたのは、新しい発見だった。

人間、追いつめられるとホントに出るんだね、火事場の馬鹿力：ははは。

「ありがとうございました。またのお越しをお待ち申し上げております」

「どうも、いろいろ大変、お世話様でしたー」
疲れ切ったあたしは、深々と頭を下げてくれる店員さんにへろへろの挨拶をして車に向かう。

数歩先には大量の袋を下げた近衛氏がいる。結局こいつのお眼鏡にかなった服ばかりを20枚近く買わされて、腹立つことにそこそ似合っちゃって、疲労通り越して脱力状態。

最初に着せられたスリッパドレスにボレロを着て店を出るよう言われた時も、反撃の気力すら残ってなかった。

「っと」

萎えた足の細いヒールが、歩道のタイルに引っかかる。展示してあった華奢なミュールは不安定で、どうしてもふらついちゃうのだ。「あんたのせいだからね」

荷物を積み込み戻ってきた近衛氏に恨みがましい視線を送ると、彼はさわやかに掌を差し出して来た。

どっかの貴族でも真似るみたいに、そりゃあ優雅にね。

「うん、悪かったね。お詫びに車までエスコートするよ」

いんや、結構だ。口元が変に歪んでんのよ、あんた欠片も悪いと思っけないじゃんか。

かたくなに首を振ると、近衛氏が嬉しそうに相好を崩す。

「そう、歩けないんだ」

ふわりと体が持ち上がり、気付いた時にはお姫様だっこって…っ！

「ぎゃー！降ろして、恥ずかしい！！」

「騒ぐと人に見られるよ」

暴れるて、騒ぐと、確かに道行く人が好奇の目でこっちを見てる。わかってるよ、わかってるけどさ、これはどうなの？！

涼しい顔して車に向かう近衛氏はこっちの願いなんて聞き入れる気はなさそうで、仕方なくおとなしくなったあたしを嬉しそうに車まで運んだ。

「嫌がる君を無理矢理ねじ伏せるのは楽しいね」

助手席に降ろしながら、小声で、でもわざわざ聞こえるよう、恐ろしいこと言わないで。

この男から逃げるには、
どんな手を使えばいいのよ…。

ちんぷんかんぷんのメニューから顔を上げたあたしは、楽しそうにこつちを見ている近衛氏にそれを突き返した。

アルファベットばかり：いや、もしかすると英語ですらないのか？が並んでる紙切れを、解読するだけの脳は持ち合わせてないっつーの。こいつ絶対知ってて渡しやがったな。

「好きな物を頼んでいいんだよ」

睨み付けてやればどう誤解したのか、親切ごかして薄ら寒い笑顔で言われたから、つられてにっこり返してやった。

「生憎とフランス料理なんて食べたことないんで、好き嫌い以前の問題でして」

一瞬顔を顰めて不快を表してたから、あたしの嫌味、通じたらしい。

だいたいここって女子高生が食事に来るような場所じゃないでしょうっての。

周り見てみな？めかし込んだ老夫婦やら、エリート然としたカップルやら、お子様なんていないんだから、場所考えて連れてきてよね。

「なんだか不満そうだね」

不満だらけじゃー！って叫びたかったけどここじゃあつまみ出されるだろうからなあ。それに、目の前の鉄面皮は、その程度じゃ眉1つ動かさないだろうし。

仕方ないんで溜息に似た深呼吸の後、入店以来の疑問を零す。

「ここへは嫌がらせで連れてきたの？」

至極穏便に、けれど確信をもって聞いてみた。食事でまで遊ばれちゃかなわないから。

ところが、嘘くさい笑みを引っ込めた奴は、被害者面して言うのだ。

「ひどいな、あの家じゃ和食ばかりだろうと気を遣ったのに」

「そんならファミレスのが理にかなってんでしようが」

「：？女性と食事するのに、ファミリレストランじゃ失礼じゃないか」

ずれてる、ずれてるよ、世間様一般から。

でも、ま、それが本ならひどい誤解をしたことになるわけで、いや、元はといえば疑われるような性格をしている近衛氏に大半の責任はあるわけだけど：転嫁行為というのは良心がしくしく痛んじやうからなあ。

いやだけど、きちんと両親に教育された娘としては、頭を下げなきゃなるまい。

「ごめんなさい。ずっと意地悪されてたからちょっと疑った。けどフランス料理はちょっと：和食を食べ続けるよりつらい」

てなわけで、己の非は素直に認めてさっさと謝る。ついでに不満もため込まず、さっさと吐き出すに限る。

それから、目の前に並べられたまばゆいばかりの銀器を視線で示して、あたしは不思議そうこっちを見ていた近衛氏に苦笑する。

テーブルマナーはまだ、お祖母ちゃんから教わってません。

「ああ、そうか」

ありがたいことにやっと、事の次第を理解してもらえたらしい。

せっかくのご親切でもねえ、相手見なきゃ。あたしは所詮、あなたの常識では量れない世界に住んでる人間なんですよ。にわかお嬢なんです。

「庶民は外食するのに、こういうところ来ないんだ」

ひがみでもなんでもない、正確な情報を与えると、近衛氏もちよ

っと困ったように笑った。

だって、いないでしょ？ ちょっとそこまで、フランス料理食へに行く中流階級って。今は空前の不景気だしね。

「こちらこそ悪かったね。女性は大抵この手の店を喜ぶものだから、つい」

自嘲気味に言った近衛氏は、今度はちゃんと本心から悪いことしたって思ってるのがわかる顔してる。だからってわけじゃないけど、この件に関してはちよびっと同情的になっちゃったわけで。

「住んでる世界が違うってお話の台詞じゃないけど、こればかりは理解しようがないもんね」

知り合ってから初めて、相手の立場に立った意見てのを、言ってしまった。

「僕は確かにいじわるだけど、君をバカにしようとした訳じゃない」そのおかげなのか、ひどく誠実な真顔で断言する彼に、あたしは笑って見せる。

「わかってる」

近衛氏なら、もっと自分が楽しめそうないじわるするもんね。何て言うか人をからかうにしても、もっと品よくやるって。どっかの三流ドラマよろしく、見え見えな手段でおとしめたりしない。

他人に恥をかかせてほくそ笑む卑屈な満足は、余程品性下劣でないと愉快だとは感じないものだ。短い付き合いだけど彼がそんな人間でないことは、なんとなくわかった。

「出ようか？」

ほら、ね？ 声を潜めて、氣遣ってくれる辺り、近衛氏は性根から腐っているとは思えない。

だから心配げに聞いてくるのに首を振ると、あたしは突き返したメニューを取り返して再び開く。今度は一人で見えるんじゃない、テーブルの真ん中にでんと置いて二人でのぞき込めるように。

「チャレンジ精神は大切だし、自分じゃ読めないけど、解説付きなら選べるでしょ」

「…優しいね」

「期間限定なんで、せいぜい堪能して」

店を替えてくれようとしたその心遣いに免じて、あたしはここで食事をする覚悟を決めた。

苦手な雰囲気だけど、正面には逃走を誓った相手がいるけど、今回は許す。

「でも次回は安心して食事ができるところにしてよね」

「…次回もあるんだ」

微妙な間を開けて意地悪く歪んだ口元に、失言を悟った。

まずーい！つい雰囲気と言っちゃた、無いぞ次は無い！おかしい期待するな！

貧血を起こしそうなほど激しく首を振ってるのに見ないふりで、したり顔の近衛氏はメニューを説明し始めた。

これ、これなんだよお、こいつのいじめは。人の揚げ足取りやがってー。悔しがらせやがってー。

「肉にする？魚介類がいい？」

完全にお楽しみモードに入っちゃった近衛氏には何を言っても無駄で、諦めに支配されたあたしはおとなしく食べたい物を決めたのだ。

あくまでイヤイヤだからね。決して敗北した訳じゃ、ないから。念のため。

結局適当に頼んだのに、さすがは一流店。どれも結構なお味で、マナーもさり気なく悪魔がフォローしてくれたから、美味しく頂くことができた。

なぜだか会話ははずんだし。内容は学校のことだったり、家族の

ことだったり、あたしのことはかなり聞き出したくせに、自分についてほとんど話して無いじゃないかと気付いたのは、デザートをほおぼる頃。

「一つくらい質問に答えなさいよ」

ザッハトルテを味わいながら、数ある質問をするりとかわす、むかつく男を睨みつけた。

「いいよ、一つだけね」

えらそうなそのセリフに、開いた口がふさがらないとはこのことだろう。

どーしてこー秘密にしたがるかなあ。やましいところでもあるんか！…ってまくし立ててもこの調子じゃ返事しないんだろうな。邪気の無い笑顔浮かべて、頑ななんだから。

「…家族構成」

このくらいはいいだろうと見上げると、近衛氏は小さく頷いた。

「祖父母に両親、兄が二人と妹」

「4人兄妹、だから婿養子にこれるのか」

「三男じゃ期待もされないからね」

…えー、あんたの性格って起業家向けだと思うけど。

騙し合いなんて得意分野だろうに、近衛氏は兄達は優秀だよって笑ってる。

隠してるな、なんか大事なことを。…食えないヤツ。

「妹さんていくつ？」

答えやしないこと聞いても仕方ないから、当たり障りのなさそうな質問を試みた。

1つだけって言ってもこれくらいならいいでしょう。つーか、普通の人間なら話しのついでと口にするはずだ。それが会話、カンバセーションってもんじゃないか。

「僕より3つ下だよ」

当然、近衛氏も流れに乗ってするりと口にして。

「へえ…ってあなたの年知らないじゃない、あたしなめてんのか！」

「二つは答えない」

自分の年まで教えない理由って、なにさ…？

近衛氏との食事から3日が過ぎた頃、あたしが手に入れたのは複雑な着物を着る技術とお茶会での作法、そして彼に関する豆知識だった。

ちなみに着付けとお茶についてはそれこそ睡眠時間を削って叩き込まれたんだからね、ドラえもんがいるわけじゃなし、努力をしないで手に入るものは無い。

だけど、なんだってこんな超特急で覚えさせられなきゃならなかったのか：理由はわかんないけど、お祖母ちゃんは怖かった…。まじ、鬼ババだった：

その辺は思い出したくないんで置いて、近衛氏の年齢は25才、お兄さんは30と27才で妹さんは22。家族経営の会社は自社ビルを持つ程の大きさで、社員も100人規模の商社なんだそう。社内での地位はなんとか部長。興味ないんで忘れた。

お祖父ちゃん曰く家族仲は良好で、彼が自分の事を話したがいような秘密はないってこと。

じゃあ、なんで隠すんだ。秘密主義ってより、犯罪者の如き隠しっぷりだったけど？

愛人の子だったりして、と言ったら笑い飛ばされた。生まれた時から知ってるお祖父ちゃんには妄想に近い邪推だったらしい。

はて？それじゃどうして内緒にしたがるのやら、一向にわからない。家族の話題なんて一番当たり障りなさそうなんだけどなあ。

「これ、集中しなさい」

厳しいお祖母ちゃんの声に我に返れば、アヤメの花が泣けちゃうくらい短くなって、手の中でしょげていた。

あああ：かわいそうなことしちゃったよう、どうしようこれ。

縫るようにお祖母ちゃんを見やると、珍しく口元に笑みを浮かべて哀れな花をあたしから受け取って、苦笑い。

「捨てなくても、大丈夫だよね？」

自分でやったことだけど、活けられないからってゴミになるのは可哀想すぎる。

一体どうするのか恐る恐る伺うと、いつにない柔らかな表情でこちをチラリと見た。

「どこにでも活かせる場所というのがあるんですよ」

そう言うと、既に剣山に刺された花たちの根元を隠すよう、お祖母ちゃんはアヤメを入れてみせる。

すごい、全然見られるじゃん。全体のバランスも良くなったし、完璧！きっちり救われてる。

安堵しながらも、けれど、やっぱり切っちゃいけないのわかっててやったあたしは良くないんで、ここは素直に謝ることにした。

お稽古ごとは嫌いだけど、上の空でやるのはよろしくない。

「ごめんなさい。真面目にやらないで」

がみがみやられるの覚悟して頭を下げたのに、お祖母ちゃんは気をつけるように言っただけで、それ以上叱ることはしなかった。

訝しむ視線をやっても穏やかな表情がみえるばかりで、気持ち悪いくらい。

「具合でも悪い？」

鬼の霍乱ってやつかな、調子悪くて怒る気力も無いとか。

疑り深いあたしに呆れ混じりの吐息をつきながらも、珍しく怒るでなくお祖母ちゃんは理由を話してくれる。

「なんともありませんよ。わかっている者に更に言い募る言葉がないだけです」

「謝ったからおつけーってこと？」

「それもあるけれど、早希はアヤメを切ってしまった時自分の非を認め、花の心配をしたでしょう？その優しい心根に免じて、と言う所ね」

微笑んでるお祖母ちゃんは、ついぞ見たことのない顔をしてた。いつもの鬼教師じゃなくて、まるで孫を可愛がってる祖母のとも言うのかな。お祖父ちゃんがあたしを見る時の目と同じ。

…どんな心境の変化よ？

「着付けもお茶も拙いなりに頑張って覚えだし、私が何をやらせようと早希は文句は言わない。すぐに逃げ出すものと思っていただけに少しあなたを認められたのよ」

しかめっ面のあたしに気付いたお祖母ちゃんはそう説明すると、照れ隠しにか花器の花たちを整えだした。

おっかないだけだった人の本心をちよっと覗けて嬉しいんだけど、そうかあ逃げて良かったのかあ…近衛氏でいっぱいだったから、そっちまで頭回んなかったや。

真実って、残酷だねっ。ごめん、お祖母ちゃん！

ともかくお祖母ちゃんに認めてもらえたのは収穫だし、これはこれでよしとしようじゃない。

「言葉使いは直らないけれど、人前に出る時に気をつけてくれるのならばいいでしょう」

床の間に花を置きに立つ背中に誓いましょう、人前ではお祖母様って呼ぶからね！…決して、真実を黙ってることに対する罪滅ぼしとかじゃ、ないよ？

なあんで、孫娘が健気な決意をしたって言うのに、直後の台詞はちよっと頂けない。

「では、日曜日には近衛さんのお宅にご挨拶に伺いますから」

「…何しに？」

我ながら間の抜けた質問で、泣けてくる。わかってます、わかっていますよ、ああもちろん！

近衛氏の自宅訪問訪問したら、理由なんて1つしかないじゃないのさ。

「結婚のお許しを頂きによ」

そら来た。

「はあ?! あたしの意志は?!」

叫んじゃえ、そんなこと承諾した覚えないんだから。や、まって、褒めてくれたのとか前フリ? だから、諦めろって? 冗談! 「違う相手も検討してくれるんじゃないの? どうして婿は近衛氏って決まってるの。三男であたしが気に入るような男でひ孫見せてくれような男なら他にもいるでしょ」

聞きかじった祖父母の事情をまくし立てながらどうしたらこの人達はわかってくれるのかと頭をフル回転させる。

少しずつ譲歩しながら家族を作ろうってのに、ここだけは初期設定と替わらないなんて変でしょう。

振り返ったお祖母ちゃんはおあたしの剣幕に動じることなく、逆に理解に苦しむって顔でこちらを見つめてきた。

「むしろ早希が近衛さんをそこまで嫌う理由がわかりません。条件を抜きにしてみても、彼は誠実で穏やかな良い人でしょう」

「誤解です! アレは二重人格の悪魔なんだってばあ。騙されてるよ二人とも」

知らぬが仏なんだって。でっかい猫かぶってるんだよつ。

「では彼に良いところは一つもないと?」

必死に抗議すると、流された視線で追い詰められる。

「:うっ、それは:」

言葉に詰まってしまった。聞いちゃダメだよ、反則だって。ちょ

つとだけど、いいところ見ちゃったから、さ。

近衛氏は：嘘はつかないな、からかって遊ぶのが好きっていう、大層ねじくれた性格の持ち主だけど、お金持ち特有の鼻持ちならないところはない。顔もいいし、秘密主義だけど大嫌いつて程じゃない。なにより、他人を思いやれるところが：少しある。

人を動物扱いするし、ホテル連れ込もうとする危ない人だけど時には優しくったりするし、でも始めに最悪な出会い方しちゃったから、近衛氏は無条件でお婿さん候補から外してた。いいところ捜してみようとか、恋愛対象としてどうか、見てなかった気がする。だから、さ。

「早希が彼では駄目だと言う根拠はなんです」って更に問われてに困った。

二重人格も楽しめばそれまでって気がするし：あれ？あたしの気持ちってこんなに曖昧なもんだったかな。

近衛氏は、そんなに嫌な人？

「納得のいく答えを持ってこられたなら、彼とのこと考え直してみよう」

一人首を捻るあたしを残して、お祖母ちゃんは部屋を出て行った。え、待って、待ってよ！近衛氏が婿じゃ駄目な訳って何？誰か教えてっ！

「今日は素直で気持ち悪いね」

バッドタイミングで夕食のお誘いに來た近衛氏が、狭い車中でサラリと嫌味を。

いつもならソッコー言い返す所なんだけど、事実だからつい黙り込む。

お祖母ちゃんに投げ入れられた小石がどんどん波紋を広げて、彼について考えなきゃいけないって思いが、強迫観念に近くなっている、本人目の前にすると喋るよりも観察、しちゃうんだよね。

ここは良いところ、ここは嫌なところって。

虫が好かないって言い切っちゃいたいんだけど、顔見るのもイヤってんじゃないきゃ説得力に欠ける気がするし…好きって感情は理屈じゃないんだから、考えてもなあ。

でも～しいかあしい～。

「本当にどうしたの、具合でも悪い？」

あんまりにもあたしの様子がおかしく見えたのか、車を脇道に止めてまで、近衛氏がこちらを覗き込んできた。

うう、綺麗な顔のアップ。意地悪してない今はこれは好みの顔だし比較的…好き？

気遣ってくれる優しさも持ち合わせてるなら…これも好き？

でも、さっきの嫌味は嫌いだし。基本的に意地悪なところは、範疇外だし。

「黙ってたらわからないよ。引き返そうか？」

「…ダイジョブです。構わないで行って」

心配してくれるのはありがたいんだけど、当の本人に話したからってどうなるもんでもない。自分の口から長所や短所を話して貰ったって、それじゃただの自己紹介になる。客観的とはほど遠い。

それっくらいなら1人、悶々としてるほうがましってもの。

「…無理しないで、駄目なら言うんだ。いいね」

念押ししてから車を発進させた近衛氏に頷いて、あたしは無限ループにはまりつつある無駄な努力を繰り返していた。

良いところ探し…ポリ○ンナか？世界名作劇場だ。ははは…。

「…一つ聞いてもいい？」

ふと思いついたあたしは、運転する近衛氏の横顔に視線を送る。

「答えられることなら」

ちよつと優しいかなって思ったのに、結局それかい。意味不明の秘密主義者め。

「大事なことなんで、絶対答えて下さい」

誤魔化すなよって睨みつけた後、今回の件で最重要なんじゃないかと思う質問をぶつけてみる。

きつと、これがわかればうじうじ悩む必要もないって、明快なヤツを。

「あたしのこと、好き？」

そろもうストレートに、いっそ気持ちが良いくらいと真ん中に。

近衛氏が結婚を決意するまでは聞いたけど、あんたの気持ちはどうなのよ。あたしが意地になったのも、逃げ出したいのも、そもそもそこが原因な気がしてきたんだよねえ。

自分を好きじゃない男と結婚したりするのって理解できない。お子様って言われようと打算で結婚できる程冷めてないんだよ、10

代は。あたしは。

ところが、ここでも近衛氏は秘密主義を貫こうって腹らしい。作り物めいた微笑みを崩さず、切り返す。

「：僕の気持ちだけ聞き出そうって言うのは、狡いんじゃないかな」
そう簡単に、逃がすもんか。

「結婚するって張り切ってるのはそっちでしょ。プロポーズするなら告白付きでお願いします」

しれっと返すと、首を傾げて、

「プロポーズ：今更必要なの？」

と。でもね、心なしか顔色が冴えなくなってきたませんか、近衛氏ってば。

ああ、出会ってから初めて優位に立ってる気がする！

「必要です、めっちゃめっちゃ大事な事です。あたしにとっては人生の残りを丸ごと決めちゃうことなんだからね、しかもフツー一生に1度の大事件だよ？ なあなあで済ますわけじゃないじゃん。あなた得意の嘘と誤魔化しも受け付けてません」

きっぱりはつきり言い切って視線をフロントグラスに据えたあたしは、流れる景色を見送りながらそっと息を吐いた。

今の状況でプロポーズされたからどうなるってものじゃない、自分の気持ちが変わらないのに返事ができるはずないんだから。

でも、近衛氏の気持ちを聞くのは、すんごく重要なんだよね。

スタンスって言うの？ その人に対する立ち位置、これが決まらないことには恋愛が始められないんだもん。そこをすっ飛ばして婚約とか、結婚とか、ありえないし。

なのに、信じがたいことだけど、あたしこの男と会ったり話したるするの馴れて来ちゃったんだ。お祖父ちゃん達と一緒に近しい人物に認定されてる。好意、悪意、関係なく身近になったから余計こんがらがった、友人と結婚しろって言われたみたいにな。

友情から始まる恋もあるけど、それにはまず意識することから始めないと。ある日、突然好きになるなんて奇跡みたいな瞬間を待ってる時間が、こっちには無いんだもん。

だから聞かせて。恋愛する気があるのか、大人の事情で結婚するだけなのか。

祈りにも似た時間、お互い黙り込んだまま、今後を決定する一言を待っている。

息詰まるような静寂を破る近衛氏の言葉を。

「…結婚して下さいって言うけどね、君を好きかと聞かれると困る。嫌いではないけれど恋してるわけじゃない」

やっと発せられたのは、無表情な、声。

感情を排除したそれは、揺らぐことなく響く分、本気なんだと嫌でもわかるもので。

なんとなく、予想していた答えだったらから驚きはしなかったけど、どこかで失望してもいた。

上手に騙してくれたらしいのに。小娘謀るのなんか楽なもんでしょ？嘘でもいい、恋は始まってるかもしれないって笑ってくれたら、あたしは信じてあげたのに。

「今後、恋することもない？」

苦笑いで、最終確認を。

「可能性は…低いね」

最後までバカ正直な男に、力が抜けた。おかげでいとも簡単に答えが出たからね。

よかった、きちんと答えてくれる人で。子供の戯言って聞き流さないでくれる人で。

「じゃ、この話なかったことにしよう」

「僕は会長を…」

「お祖父ちゃんの心配はあたしがする」

この前聞かせてもらった理由を引っ張り出そうとした近衛氏を制して、困惑した横顔を見つめる。

「恋愛しないで結婚はできない、お父さんの娘だからね。でも駆け落ちもしない、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんが悲しむから。あなたは二人のお気に入りだけど、事情を説明してわかってもらう。…あたしは好きな人と一緒にいたい。大切な家族を捨てることなく、全部一緒に抱えていたい。それは当然、恋してる人とね」

前を向いたままの彼の顔は困惑の色を消し、全くの無表情になっていた。

最後通牒を聞いても、動揺することもなく冷静で。
冷たい横顔、感情が見えない分そう思えるほどに。

「…うん、わかった」

でも、それは一瞬のこと。柔らかく微笑みながらこちらを流し見た彼は、いつもと同じだったから。

「でも、今晚の夕食は付き合ってもらえるかな？」

レストラン、予約しちゃったからねって言った彼に曖昧に頷いたあたしは、何ともすっきりしない気分で。

やっと逃げ出せたのに、当初の目的を果たしたはずなのに、この引っかかりは何だろう…どうして冷たい顔した近衛氏が気になるんだろう…。

やっぱ、あれ？別れ際、もう会うこともないねって言った彼が、綺麗に瞳から色を消していたせい？

笑ってるくせに笑ってない、あの表情が忘れられない、から？

近衛氏とのやり取りをお祖父ちゃん達に説明してから、一月近くが経っていた。

難航する覚悟で始めた説得だったのに、意外なほどあっさりと二人は結婚話を白紙に戻してくれちゃって、なんだか拍子抜け。

「早希が好きな人と一緒になりたいというのはわかりました。他にも候補を捜しましょう」

これがあのお祖母ちゃんの台詞だよ？信じらんない！！
でもね、わかったんだ。

2人ともやっと会えた孫娘が逃げないように、必死だったんだって。お祖父ちゃんはもとより、お祖母ちゃんも始めの頃よりはたくさん話してくれるようになると、ぽろぽろ本音が零れ出すんだよ。

お父さんが出て行ってしまってからどんなに寂しかったのかとか、時折お母さんから送られてくるあたし達姉妹の写真を大切にしまい込むくせに、わだかまりがあって連絡できなかったとか。

聞いているこっちが泣けるようなこと呟くの。

自分達の息のかかった男と結婚させてしまえば、孫娘を手放さずに済むと思ったなんて、2人が茶飲み話に言った時、あたし誓ったもの。絶対にここで暮らすんだって、ひ孫どころか玄孫だって見せてあげるって。

そんなことがあった翌日、お父さん達が訪ねてきた。

お姉ちゃんが泣きながら謝ってくれて、家族みんなであんたに会わせてくれるよう日参したって教えてくれて。

あたしがこの家に住むって宣言したから、お祖父ちゃん達が家族の出入りを許したんだよね。みんな幸せな笑顔になれた。三世帯揃

って。

でね、だからこれも新しい日常。

「これ有希。もっと丁寧に」

あれからあたしと一緒に祖母ちゃんに指南を受けているお姉ちゃんちゃんは、大きなため息をつくとき茶筌ちやせんを置いた。

「もうだめー。手が痺れてきちゃったよ」

ぶんぶん手首を振る仕草はお茶の優雅さとはかけ離れていたけど、お祖母ちゃんは苦笑を浮かべただけで何も言わない。

あたしのお稽古が厳しかったのは近衛氏の所に挨拶に行く為だったらしくて、余裕を持って教わるようになってからはそう厳しい先生じゃないんだよね。

わかつちやいるけど、理不尽だ。

和やかにお茶を点ててる2人を眺めながら、あたしは平和で退屈な時間にため息を禁じ得ない。

なんつーか暇、なのよね。

和解が済んでから逃げる必要もなく、近衛氏も現れない。同じ事の繰り返しで張り合いが無いのだ。

戻りたくはないけど目標のある毎日毎日は充実してて楽しかったし、彼の顔が見れないのはちょっと寂しいような…最後に見た冷たい表情が気になってしょうがないような…。

会ったこともない小娘との婚約だって楽しんじゃう計算高いサデイトが、会話の中で初めて見せた本当の顔。

うん、あれはきつと近衛氏の地だよね。

自分のことを話したがないのは何か事情がある、その謎は最後に交わした言葉にヒントがあるんだ、絶対に。

あの夜から、気付くと近衛氏の事を考えてる。

自分で断ち切った縁なのに、離れて見ると何も知らない謎の男はなんと興味深いことか。綺麗な顔して秘密主義で二重人格、学校で先輩後輩だったなら憧れの人物になっただろう彼を、手に入れてたのに手放した。

その判断に間違いはなかったって断言できるけど、反面こうも思うんだよね。

もったいない、すんごく損した気分だわ。どこまでも追いかければ良かった、手に入るまで何度だって挑戦したら心ごとあたしのものになったかも知れないのに。

最後の最後で見せてた顔、あの本当の近衛氏にまた会ってみたい。それまでずっと隠してきたモノをあそこで見せるなんて、あきれ果てるほど性格が悪いよね、あの人。

興味は、恋の始まり。うっかり踏み込んでドツボに嵌ったあたしは、好奇心に負けた。

性格悪いがどうした。顔が良けりゃプライゼロ。認めるわよ、好きだって。

「ちょっと早希、さぼってないで真面目にやりなさいよ」

悔しさに歯がみしてたあたしを現実引き戻したお姉ちゃんは、何とか様になったらしいお茶を誇らしげに突き出していた。

飲めって？はいはい、わかりましたよ。

「頂きます」

お祖母ちゃんに怒られないよう、覚えた作法を活用してできるだけ急いで、できるだけ上品に、一服ちょうだいする。

「ごちそうさま！ちょっとお祖父ちゃんと話しあるから、ごめん」

茶碗を置くと一緒に立ち上がった背中これってお叱りが飛んだけど、今は胸の中に灯った小さなやる気を実行する方が先。振り返

らず、走り出す。

好みのタイプなのよ。逃がした魚は鯨並だったの！だからもう一度釣り上げてやる。謎を解くの。

邪な決意を秘めて、あたしはお祖父ちゃんの書斎へ向かった。猛スピードでね。

逃げるのは、もうやめたわ！

近衛氏の自宅は外観も内装もとっても洋風だ。

家具はアンティークで、照明も煌びやかなシャンデリア風？カッ
プもきつと高いんだよね薔薇模様が目に痛いくらい。

ここのところどっぷり和風に浸かっていたあたしには、身の置き
場が無いっていうか根っから庶民のせいで、腰が落ち着かないって
いうか。

正面に鎮座する近衛母もマダムって呼びたくなっちゃう上品なご
婦人で、隣にお祖父ちゃんがいなかったら逃げ出したいほどだね。

「お会いできて嬉しいわ」

がちがちに固まってたあたしは、おば様の声に大げさな程身を竦
ませて顔に作り笑いを貼り付ける。

「ご挨拶が遅れまして：風間早希と申します」

ああ鬼ババの特訓がこんなに嬉しいなんて、思いもしなかった！
うるさいくらいに直された言葉遣いも、立ち居振る舞いも、めち
やめちゃ役に立ってる。ありがとーお祖母ちゃんっ。

ところが、教科書通りの挨拶をしたあたしにころころ笑ったマダ
ム・近衛は、堅っ苦しいわよなんて手を振って。

「そんなに緊張しないで。私もここに嫁ぐまではサラリーマン家庭
に育った、普通の娘なんだから」

近衛氏とよく似た顔で優しく微笑む彼女は、ちゃめっ気たつぷ
りにそう言う優雅に小首を傾げて見せた。

「全然見えない……」

嘘のような告白につい素で呟いちゃったよ……。

金持ち特有のジョークだったりしたら、怒られるのかな？バカに
するなとかって？

でも、不安は気分は肯定するおばさまの声で吹き飛んだ。

「事実よ。周りに合わせてたらこうなっちゃったの。でも家の中じややっぱり地が出るわね。だから早希ちゃんも普通でいいわよ」

気軽な調子で、ちっとも気取った風でない、心に気持ちの良い言葉。

「変わらん、佐和子さんは」

それを受けたのは何故かお祖父ちゃん、意外なほど豪快な笑い声を上げるおば様と、なにやら近況報告から始めて。

2人して、盛り上がらないでください。

楽しげに昔話に花を咲かせ始めちゃったご両人は、内容から察するに随分古い友人みたい。

近衛氏だけじゃなく、その兄2人も生まれた頃から知ってるようだから結婚直後、下手するとその前からの知り合いの可能性大ってとこかな。

しばらく共通の話題で談笑していたんだけど、このままで近衛氏に会えるのかと心配になってきた頃、突然2対の目があたしを注視した。

「隆人がダメなら、大嗣ひろつぐか将彦まさひこどっちでもいいわよ？」

身乗り出して問いかけてきたおば様に、こっちは目を白黒させて人名の確認。

えっと隆人が近衛氏で、大嗣が長男30才、将彦が次男27才だったよね。は？待って待って、みんな独身なの？それ以前に長男とお婿に出しちゃっていいの？

パニックってるあたしにおば様は大きなため息をつく、こっちの状態を無視して話し始めた。

「私も主人もね、どれでもいいのよ。早希ちゃんさえ気に入ってくれたら、好きなもの持って行ってもらって。それなのに、一番ねじ曲

がつてる隆人が年齢的に自分が適役だって宣言しちゃったものだから：無理はわかっていたの。あれじゃ気に入らないわよね」

お婆様、今すんごいこと言わなかった？どれでも持ってけて：最近じゃ猫の子にも使わないですよ、その言葉。しかも近衛氏じゃダメだって家族があっさり言い切るなんて。

とんでもない貧乏くじを引いた気が一瞬するけど、もうしょうがないわ。あれでいいって決めちゃったんだもん。時既に遅し、です。

「その件なんですけど、この：隆人さんに会わせてもらえませんか？少しお話したいことがあるんです」

大嗣より将彦の方がつてぶつぶつ言ってるお婆様に遠慮がちに声をかけると、こちらに不思議そうな視線が送られてきた。本気なのって、引き留めるような確認の。

「会話になるかしら？あの子の屁理屈ときたら：」

いや、だから仮にもあなたの息子じゃーん！

「心配無用だよ。早希は隆人君に負けておらんから」

横から会話を引き取って、請け合ってくれたのはお祖父ちゃん。

ナイスフォロー、ありがとう！

「今日もどうしても話をしたいと頼み込まれて連れてきたんだ。呼んでもらえんか」

強力な援軍にお婆様は僅かに逡巡した後、重い腰を上げる。

「大嗣と将彦にも会ってやってね」

て言い残しながら。

あの様子じゃ、あたしの相手に近衛氏は不適當と烙印を押しちゃった感じ。そんなに問題児なのかあの人は。

や、問題児だけど、あの人は。

「佐和子さんはどうしても、風間に近衛の息子をくれたいんだよ」
あたしの無言の疑問を引き取ってお祖父ちゃんが苦笑した。

「彼女が隆人君の父親と結婚する時かなり反対されてな、二人に助けてくれと泣きつかれた私たち夫婦が、説得と佐和子さんの教育を引き受けたんだ。それに恩義を感じてるんだろうな。自分の息子に同じ事をしてしまって後悔していた我々に、孫娘を引き取ったらどうか、婿が必要なら是非自分達の息子をと、随分親身になってくれた」

照れくさそうにそっぽを向きながら話してくれた内容は、お祖父ちゃん達が近衛氏との結婚を強引なまでに進めようとした真相で、お婆様のどの息子でも持って行けと無茶なことを言った理由に繋がっていた。

うーん、こりゃ何が何でも近衛氏を説得しないと、余計な婿候補が増えることになっちゃうな。

事情がディープなだけに全く別の人でとは言い難いし、お婆様の力の入りようからしてもお兄ちゃん達の意志はあってないような雰囲気だしなあ。もう一度あれをやるのか…退屈はしないだろうけど、体力使いそう…やだな、それだけは。よし、こうなったらなんとかしても近衛氏を説得せねば。

パタパタと廊下を歩く音が近づいてきたのに決意を新たにしたあたしは、お祖父ちゃんにちっちゃく拳を握って見せる。

「このえ…隆人さんがいいんだ。頑張る」

「うむ、頑張れ」

さあ第2ラウンド開始だよ！

「お待たせ」

にこやかに現れたお婆様の後ろにいたのは、近衛氏だけじゃなかった。

見知らぬ顔がもう一つ。正体は言われなくてもわかる、お兄さんのどっちか。

「大嗣がそこにいたものだから、連れてきちゃった」

ついでを強調するお婆様の目が光ったの、見逃さなかったから。

これって、わざわざ呼んでるよね。あたしに意地悪する時の近衛氏の表情とそっくりだったもん。

この計算ずくの演出を気付かないふりでお祖父ちゃんに挨拶する大嗣さんは、近衛氏より更に落ち着いた雰囲気を持つ大人の男って感じの、綺麗な弟とは正反対の渋いカッコよさを持っていた。

顔がお婆様に全く似てないところを見ると、おじ様似なんだろうな。近衛氏といい、大嗣さんといい、凡人のあたしと並べて置いたら女の方が完全に見劣りする構図の完成で、何だか虚しくなってくる。

お婆様、できれば普通の見かけの息子を生んでくれたら良かったのに。

「こんにちは」

考えを中断するようにかけられた声の主は、近衛氏。

白いTシャツにジーンズなんてラフなスタイル、初めて見た。

仕事帰りのせいかいつだってスーツにネクタイだったもんね。乗っかってる顔がいいせいで、どんな服装でも似合うのが気に入らない。

相変わらず好みのタイプじゃない。悔しいくらいに。

しかし一月も前に婚約解消した相手と久しぶりで会ったっていうのに、気まずさもなく接することができるとは… あたしの事なんて思い出すこともなかったって事？ むかつくことっ。

「どおも」

八つ当たりだとわかってるけど、平然と微笑む近衛氏が氣にくわなくてふてくされた返事をたら、困った笑顔がちょびつと歪んだ。

「僕に話があるって聞いたけど、その表情からすると苦情かな」

あう、そうだった…。ここでケンカ売ってどうするよ、もう一度お願いしますしに來たのにさ。

近衛氏、完全に誤解したよ、あの顔は。さて、どうするか。

そこで気付いた好奇の視線。自分たちは違う会話をしていますって顔して、なにげに耳をそばだててるじゃない、みなさん。

盗み聞き、するかねいい年した大人が。いやいや、大事な話をこんなところでしようって、あたしも悪いのか。

「それよりたちの悪い話。…場所移さない？」

なんでちらりと周囲を見てこう提案すると、近衛氏は素直に頷いた。

聞かれて困りはしないけど、わざわざ聞かせようとは思わないじゃない？

大嗣氏は純粹な好奇心だろうけど、大人二人の場合は自分の思惑が絡んでるからね、うっかり口を滑らせたら明日には結婚式だなんて事になりかねない。

できればお付き合いから始めたいので、それはごめんこうむろう。

「待って、大嗣を紹介してからにして」

立ち上がりかけたあたしを慌てて止めたおば様は、大嗣さんの腕を力任せに引っ張っている。ちっとも動いてないし、本人はやれやれって表情だけど。

「初めまして、早希さん」

無言で促されるまま社交辞令ばりばりの笑顔をくれた彼は、どう見てもあたしと結婚したがつてるようには見えないな。

お祖父ちゃんの会社って付属品を含めても、16の小娘相手じゃ食指が動かないってか？まあ14の年の差じゃ無理もないけど、あからさまに仕方ないって顔に書いてあるのはいやなもんだね。近衛氏は初対面でも結婚の意思だけはしっかり持ってたのに。好奇心といえど、興味は持ってくれてたのに。

「こんにちは」

早いとこケリをつけて近衛氏に重大発表したかったあたしは、適当に頭を下げるとさっさと大嗣氏に見切りをつけ、お祖父ちゃんに向き直った。

「ちょっとだけ待ってて。隆人さんと話してくるから」

おば様には申し訳ないけど、興味が無い者同士が話す事なんて無い。

びっくりしてる大嗣氏を置いて、あたしは近衛氏の腕を掴むとドアをすり抜けた。

気の毒に、仕事上でも男女の仲でも無視に近い扱いを受けた事なんて無かったんだろうなあ。後でちゃんとフォローするから、少しほっというね。

廊下に出た後、当然どこに行こうか戸惑うあたしを促して、先を歩く近衛氏はぐるりと巻いた螺旋階段を上がると重厚な木の扉の前で立ち止まり、無言で中へ入るよう示す。

恐る恐る足を踏み入れた向こうは、リビングとはかけ離れた装い。革張りのソファとローテーブルにテレビ、最低限の調度幅広い空間にぽつりぽつりと置かれたフローリングはラグ一枚ない殺風景さで、どこでくつろぐんだと聞きたくなっちゃう。

色目も悪いの。カーテンも壁も天井まで濃紺だよ？海の底かって

いうのよ。あんたの陰険な性格はここで形成されわけか、納得。
まさしく、近衛氏の私室でございってとこね。

「座って」

呆れ半分で突っ立ってたあたしの肩をそっと押した近衛氏は、奥のソファ―に体を沈める。その表情はこの前見た冷たい影を帯びたまま、ついさっきまでの愛想良さはどこ行っちゃって感じて。

あれ、演技だったのか。お祖父ちゃんやおば様の手前作ってただけでこの男、不機嫌？

すっかりその暗さ、背景にマッチしてこっちまでブルーになるからやめてくれないかなあ。

「読めない男」

呟きながらあたしも、深海色のソファ―に腰を下ろした。

「君みたいに考えてることが丸わかりなんて、単純にできてない」
聞いてやがった近衛氏の嫌みは、にこりともしない唇から滑り出た殺傷能力を秘めた一品で、明らかにこれまでのヤツとは違う。思わず背筋を、冷たい汗が滑り落ちたほどだ。

声も顔も目も、人間性を疑いたくなるほど冷酷で、あたしを嫌ってるなんて生易しいもんじゃなく、憎悪すら感じるってのは、これいかに。

しばらく会わない間に何かあったってのか。それともこれが本性だって言うなら、秘密だらけだ、こいつ。

「：それじゃ当ててみなさいよ。あたしが来た訳」

本能的な恐怖心を押さえつけ、好戦的に睨みつけてやると、近衛氏は鼻で笑ってご自分の大層な考えを述べられる。

「離れて考えてみたら僕ほど条件の整った男を振るのが惜しくなつた、こんなところ」

「半分正解、半分外れ」

ふんぞり返って舌を出したあたしは、全く崩れないポーカーフェ

イスを打破すべく、向き合った自分の気持ちを吐露してやることにする。

あんだだけこの男から逃げ回ったんだもん。散々罵ったこの口から、まさか愛の告白が聞けるとは思うまい。

うろたえるが良いっ。

「惜しくなったのは当たってる。その顔、いっぱいある秘密、実にあたし好みなのよね。何の因果か、好きになっちゃったの。でも、条件はいらないよ。そんなのここん家の兄弟なら誰でも一緒でしょ」
誰でも一緒って辺りで、僅かに彼の眉が上がった。本人上手く隠したつもりだろうけど、恋する乙女の観察力、バカにしたもんじゃないのよ。

で、なに、どこがヒットしたの？

「…大嗣兄さんはお気に召さなかった？」

鼻で嘲笑う風の近衛氏は、どっかネジが飛んでるに違いない。

人が結構テンパッて告ったのに、それをさらっと流すとは良い度胸じゃない。

召すか、あんなもん。大嗣さんがあたしに対して、興味の欠片も示さなかったの見てなかったわけ？

「前に言ったこと覚えてない？あたしのこと好きじゃない人とは付き合えない」

しかたない。もう一度言っただげるから、今度はちゃんと聞いときなさいよ。

ふんぞり返って言い切ると、敵も然る者、そちらこそしっぺ返し。

「僕も君を好きじゃない。この先も好きにはならない、そう言った。大嗣兄さんとどこが違うの」

「近衛氏は初対面から親に言われて仕方なくって態度はしなかったでしょう」

「作っていたのかも知れない、会長と両親にいい顔がしたかったのだとは思わない？ 兄さんは正直な分、僕よりましだ」

反論してみろってこちらを見てる冷めた目、どうにも気に入らないわ。

何故にお兄ちゃんと自分を比べたがるんだ。まさか、この男が劣等感？ ありえない！

「あんたがいいか、大嗣さんがいいか決めるのはあたし。極悪人でサドで人いじめて楽しむのが趣味な男の方がいいって言うてるの、どこが不満よ」

「そんな男より大人で地位も財産も持つてる男がいいとその内氣付いたらどうする？ 僕から兄さんに乗換えるなんて、両親が許しても兄や妹は許さない。後悔しても遅いなら、始めから付き合う相手を選んだ方がいい」

「しつこいな、条件で男は選ばないって言ってんでしょ！！」

ねちねちねちねち、うっさいんだよ！

何なのよこいつは！ そんなに兄ちゃんとあたしをくつつけたいか。そうまでしてあたしから逃げたいか。わかった、そんなら望み通り消えてやるわよ！

怒鳴りつけられたのに驚いたのか、近衛氏の鉄面皮は崩れて驚愕に固まってるけど知らない。人の一大決心を小賢しい手でかわしに来るならもう結構。

怒髪天をついちゃったあたしは、跳ねるようにソファから立ち上がると口を開きかけた近衛氏を制して捨て台詞を叩きつけた。

「はつきり言ったらいいじゃない。あたしに好かれるのは迷惑だつてさ。悪かったわね、自分で終わらせた話を蒸し返して。二度とあなたの前に顔見せないから安心すれば？」

一睨みだけは忘れずに小走りに部屋を後にしようとして、勢いよく開けた扉の向こうに見つけた人影に何かが切れる音を聞いた。

「すごい啖呵だな。隆人が黙り込むのを初めて見たよ」

にこやかに微笑む大嗣さんは、盗み聞きを隠すことなく盛大にあたしを褒めてくれる。

いつからいたんだよ、このバカ兄！

「そこどいて」

でかい図体で通せんぼしてる常識無い大人に言い放つと、あろう事か彼は寝言をのたまってきた。

「骨のある子は大いに好みだ。君と結婚してあげてもいいよ」

いやー、人って殴ると手が痛いんだね。やったことないから知らなかったよ。

派手な音に見合った手形を精悍な顔に貼り付けたバカ兄は、呆然と自分を殴った女子高生を見下ろしていた。

「兄さん……！」

慌てて声を上げた近衛氏が、後ろから駆け寄ってくる気配がする。あーあ、これでホントにお仕舞いだわ。仲直りする気で来たって言うのに、その身内ぶん殴っちゃうなんて最悪。でもここまできたらこいつらに、庶民の常識教えてあげるのもいいかも。

「あんた達に結婚して頂く必要はないわよ。喜んであたしをもらってくれる人だって広い世の中、一人や二人いるでしょう。兄弟揃って人バカにすんのもたいがいにしろ！」

条件だの、結婚してやるだの何様のつもりだ。

全身に怒りを漲らせて叫んだ声に、何故だか拍手？

ぱんぱん乾いた音させて、近づいてくる謎の人物……って同じ顔してるよ……兄ちゃんと。

休日にはダークスーツの三つ揃い。厳しい印象の残る兄ちゃんとは反対に、近衛氏の柔らかな雰囲気醸した明らかな血縁者は、間違いない真ん中の将彦君だね。

それがわざとらしい拍手しながら、ニヤニヤと（断じてニコニコ

では無い）こっちに寄ってくる図って言うのは…。

「兄さんも隆人も女の子の扱いを全然わかってないよね。早希ちゃんだって二人を相手にしてたら怒り出したくもなるってものだよ」
いやあ…知ったかも、かなりむかつかます。

つーかあんたも立ち聞きですか？この家の防音対策はいいんだけどうなってるんだ。

「初めまして早希ちゃん。次男の将彦です」

くると効果音つきそうな華麗なターンを決めた彼は、気味の悪い笑顔をずいっと近づけてあたしの手を取った。

「結婚して頂けませんか、お嬢さん」

口づけられた手の甲から走ったのは悪寒。

吐き出された言葉に走ったのは虫ず。

おば様、もうちょっと普通の息子を生んで下さい！！

ええーい、逃げ道はどっちだ？！

取られた手を引き抜こうとぶんぶん振り回すのに、馬鹿力は一向に緩む気配は無い。どころか気味の悪い笑顔で、

「照れる必要はないんだよ」

つときたもんだ。死ね！今すぐ死んでくれ！

思わずバイオレンスな気分になっちゃったところで、危うくそれを押しとどめたのは、静かに成り行きを眺めていた近衛氏だった。

「消えて下さい、二人とも」

引っぺがされる勢いで体ごとあたしを抱え込んだ彼は、頬を押さえてぶつぶつ言ってる長男と、横取りだと騒いでる次男を自分の部屋の前から追い立てると、開きっぱなしの扉の奥に踏み行つてバタンと乱暴にドアを閉る。

帰るって言った人を、引き戻してどうするのよ。なんとも思っていないんだったら、放っておいてくれればいいのに。でなければ、お祖父ちゃんのところまで送ってくれたら上出来。

「：あたしも消えるから放して」

なのに、抱きしめるように肩に回された腕を嬉しいと思うのは、近衛氏と恋愛したい自分がまだ死んでいないから。

きっちり振られても、人間の心はそう簡単に切り替えられない。

一月考えてたのよ、この人を自分の気持ちで。やっと結論出したのに玉砕して、その相手の腕の中で平静でいられるほど、あたし人生経験積んでない。

心おきなく泣けるよう、解放してくれる優しさくらい、あってもいいでしょ？

睨み上げることですの想いを伝えると、

「僕との話は君が一方的に答えを出しただけで、終わってないよ」

一瞥をくれて有無を言わせずソファーにあたしを座らせた近衛氏は、こっちの気持ちなんか無視で、横に腰を下ろした。

「あっち行けばいいじゃない。どうしてここに座るのよ」

バクバクしてる心臓を誤魔化す為、ふくれっ面で言ってみる。

だだっ広い空間があるんだから、こんなに密着する必要はないはずでしょう？ましてや逃げようと必死だった相手の側にいてどうするよ。

「言われっぱなしは好きじゃないんだ。近くにいないと君は逃げるだろう？」

そう言って微笑んだ顔の裏には、気のせいじゃない邪さが山と見えた。

さっきまで冷たい顔してあたしのこと突き放してたのに、大嗣兄ちゃんとかくつつけようと聞きたくもない言葉を投げつけてきてたのに、いきなり初めて会った頃の近衛氏に戻るなんて、どうしちゃったの？

からかうような表情は確かにもう一度見たかった彼の顔だけど、冷たいあんたが消えた理由がわかんない。

「逃げたっていいじゃん。そうしてもらおうと、あんな事言ってたんでしょ」

近衛氏の真意を測りかねてるあたしには、この豹変ぶりがどうしてもわからなかった。

「そうだね、あの時は君が僕に愛想尽かすよう話してたから。と言うよりはあれが僕の本来のしゃべり方なんだけど」

：随分物騒な物言いですんのね、あんたって人は。皮肉屋って項目も付け加えないといけないわけだ。

「大嗣兄さんと結婚した方が、幸せになれると思わない？」

微笑みながら優しく諭すようまた兄ちゃんをお薦めする近衛氏は、目が笑ってなくて怖い。

素直に頷いたら絞め殺されそうなんだけど、問いかけは肯定する

ことを前提としているようで。どう答えて欲しいのかね、この男は。

「人見下した高慢ちきさんと一緒にいて、幸せだーって感じる人がいたらすごいよね」

難しい選択は微笑み返し、嫌みのスパイス付きで。

あたしはバカにされたまま、一生を終えるなんてまっぴらよ。そう言外に伝えると、凶悪な微笑みは引っ込めないまま近衛氏は質問を続ける。

「それなら将彦兄さんは？ふざけた人だけど、女性には優しいよ」
今度は次男かい……。しかも自分でふざけた言っというて薦めますかね、普通。

「世界中の女性に優しい人と結婚できるほど心が広くないんで」
浮気性のダンナは、もっというらないっての。

随分なお薦め物件を並べてた彼だけど、お断り申し上げた時点でうーんと少し考え込んだ。

もしや、他にもいるんですか、あたしの婿さん候補は。

「僕は君にあげられるものが何もない。大嗣兄さんは長男だからこの家と会社がついてくるし、将彦兄さんは毎日甘い言葉と、望めば薔薇の花だって贈ってくれそうな人だ。それでも僕を選ぶ？会長なら別の人を搜してくれるかもしれない」

ああ、上2人の方がお買い得だと言いたい訳ね。

比較対象が間違ってることはさておいて、近衛氏の態度は変に卑屈だった。

いつも自信満々のくせに、兄達にあるものを持っていない自分を卑下してるって感じで、過去に何かあったんじゃないかとバカでも勘ぐりたくなる。

「お家はお祖父ちゃんがあそこをくれるって言うから間に合ってるし、会社もあたしとお姉ちゃんのものなんだって。甘い言葉は毎日

もらったありがたいがたみが無いし、花は望めば近衛氏だって買ってくれるでしょ？お祖父ちゃんがいくらお金持ってもあたし好みの顔して、そこそこの家柄の男はあなたぐらいのものだと思っただけ、本人があたしじゃイヤだって言うならいいかげん見切りつけないかね」

もうやけくそだよ。何言っても納得しないんだし、いっそ切り捨てたらどうなるんだろう。

あっちの気持ちかわからないことに対する苛立ちも手伝って、吐き捨てるとソファを立とうとした、んだけどね。

タイミング良く肩に回された腕にそれは阻止され、出会う真剣な瞳。

「…君は何もかも、彼女とは違うんだ」

そつとあたしの髪に手を置いた近衛氏は、見てるこっちが切なくなるような顔をして秘密を1つを吐き出し始める。

初めて知る別の顔。あたしを試しながら重ねていたに違いない、彼の中の忘れられない誰か。

「君は僕が今まで会った女性の中では、一番純粹なんだろうな。年や持っている物の大きさのせいもあるんだろうけど、気持ちだけで動いてる。結婚するなら全てを持ってる長男の方がいいとか、次男でも三男よりは手に入る物が多いなんて計算をしないんだよね」

なんとも打算的で、更には下らない考え方だけれどもしや。

「…そう言われたことあるの？」

「4年付き合った恋人にね、大嗣兄さんに会わせたその日に」

苦笑混じりの過去の傷とやらは、己の未熟さを露呈させるものだから、あたし如きに教えるにはさぞ勇気がいったんだろうけど…：なんと、呆れるくらい豪快な女の人だねえ…。

長年付き合った恋人に、情は湧かなかったんだろうか？札束の方が大事か…そんな考え方もあるのか…。

近衛氏ならそんな人切って捨てるような気もするんだけど、そうはいかなかったみたいで、歪んだ表情が今も忘れられないって教えてくれた。

「彼女と結婚したいと、両親に話すつもりで家に連れてきたんだ。当然、好きだったから未来も考えたのだし、それが一瞬で崩れたわけだからね、衝撃と失望で女性に対する偏見ができあがった。あれから2年も経つのに、未だ恋愛に心が動かない」

自嘲気味に上がった唇で、更に手ひどく振られたことを知る。

そっか、だから恋にはならないって言われたわけね。

あたし程度の本気じゃ、凍り付いた近衛氏の感情を動かすことはできなかったと。そりゃ、自他共に認める凡人ですし？ 彼のためなら火の海にも飛び込んだじゃうわくの献身的愛情も育ってませんかね、彼の気持ちをこっちに向ける事なんて、不可能でしょうよ。

だけど、玉碎なら一度が良かったな。あたし如きじゃどうにも相手にならないって、わざわざ2度もダメージくらっちゃ、さすがにしんどいもん。

「始めから、そう言ってくれたらよかったのに」
胸が、石でも抱え込んだように重くて苦しかったけど、笑った。
切なくてこぼれ落ちそうな涙も、決壊させるタイミングじゃないって必死に我慢して。

なによねー、最初から全然望みは無かったんじゃない。

頑張ればあたしのモノになるかも知れないなんて家まで押しかけて、格好悪いったらないわ。せめて最後まで格好つけなくちゃ、やてらんなわよ。

「実らない恋なんて追いかけないから安心して。上2人もね、好みじゃないけどいいところの1つくらいなら見つけられるでしょ。大嗣さんから傲慢さが消えるなら充分お婿候補としていけてるし、近衛氏じゃなくてもお婆様やお祖父ちゃんの願いは叶えてあげられる

もん」

「諦めちゃうの？」

強がり半分本音半分で息巻いてた声を、からかいを含んだ彼の声
が受ける。

それ以外どうしろって言うんだか、この男は。

人の精一杯の虚勢をどの面下げてちゃかすんだって一瞥をくれて
やった近衛氏は、馴染みの極悪人スマイルであたしを見上げてる。

さっきまでの深刻さは微塵も感じさせないその顔ったら…まった
く、読めない男。

「君なら僕を裏切ることはない気がするんだ。極悪人でサドで人い
じめて楽しむのが趣味な男が、好きなんだよね？」

「リピートすんじゃない！むかつく記憶力の良さだよね。そういう
のは忘れたふりをすんのが、紳士でしょっ」

どうして真面目な会話のまま終われないのよ。あたしがあんたを
諦めなかったら、不毛な恋愛の堂々巡りになっちゃうじゃない。

一生報われない片思いなんぞ、したくないっての。

「なかなか心揺さぶられる告白だったよ。君となら新しい恋が始め
られるんじゃないかと思うくらいに」

だけでもこの人、こっちの言うことなんぞ聞いちゃいないし…。

って…え、本気で言ってるの？あたしと恋する気になったの？兄
ちゃん達を薦めてたくせに？

半信半疑でまじまじと眺めた近衛氏の表情は、相変わらず全然読
めなかったけど、信じていいかな、ううん信じたい。

失恋より前向きな片思いの方が希望があるもの。

「ホントに真面目に、あたしと恋愛する気あるの？」

それでも疑っちゃうのは、致し方ないでしょ。

恐る恐る聞いてみたら、近衛氏は綺麗な手を差し出してきた。

「改めてよろしくね、早希」

小首を傾げて天使の微笑み。

ああ、いいわ！その顔やっぱ好み！

餌に釣られる魚みたいにうっかり手を取ろうとしたあたしって、

やっぱりバカ。

救いようのないバカ。

「まあ、君次第だって心得といて。不要になったら即兄さん達に下げ渡すから」

綺麗な顔した悪魔はやっぱり健在でした…。

ちよつとでもラッキーとか思っちゃった自分、エライ間抜け。め

ちゃくちや愚か。

考え直したいなあ…もう遅いかなあ…。

自分の愚かさを痛感した後、お祖父ちゃんとおば様に結果報告するため降りたりビングでは、当事者抜きの白熱バトルが開催されていた。

「だから、隆人ではダメだと言ったでしょう？」

でっかい紅葉に氷囊当てながらしかめっ面してるのは、長男。

「始めから、僕に任せてくれれば良かったんだよ」

老人と母相手に髪をかき上げて自分を作ってるナルシスト、次男。
「わかってたわよー。だから今日はあなた達に家にいるように頼んだでしょ？」

悔しそうに歯がみして、舌打ちまでかましたのは策士のお婆様。

「会わせるんなら、最初から大嗣君にしとくべきだったか…」

妙に納得してるお祖父ちゃんって、あんたら一体人の身内にどんな話を聞かせたのよ。

殴られるほど嫌われた長男の方がいいとお祖父ちゃんに思わせるなんて、いらんところに頭使ってんじゃないわよ！

「…ちよっ…！」

部屋に入ってきたあたし達に気づかないほど、円陣組んだ話し合いに没頭してる連中に一言もの申してやろうと前に出かけたのに、伸びてきた手に口をふさがれ阻止されてしまった。

睨み上げると、実に楽しい表情で近衛氏が愚か者達を見守っている。

企みいっぱいの愉快的瞳だね。

うーわ…やばそう…。

「大嗣兄さん、大丈夫？」

巧妙に作られた心配声を背後からかける様は、聞いているこっちが

鳥肌もの。

顔つきだって小さい子が不安に心痛める図になっちゃって、あんた誰だっーのよ。

「あ、ああ、降りてきたのか」

ぷぷぷっ！振り返った大嗣さんってば！めっちゃめっちゃ動揺して顔引きつらせて、こっちがまともに見られないでいるのよ？あの自信満々ヤローが。

もちろん将彦さんも御同様で、いきなり立ち上がった。その後どうするつもり？

おかしいほど狼狽える兄を尻目に、近衛氏はまだくさい演技を続けるつもりらしい。

おずおずと4人に近づいて、お祖父ちゃんの前に跪くと、その手を取らんばかりの勢いでまくし立て始める。実に哀れっぽくね。

「すみません、僕が至らないばかりに会長に心配をかけてしまつて。早希さんともじっくり話し合いました。僕の努力次第で彼女も結婚を考えるとayingてくれましたから」

…あんた、生粋の嘘つきだわ…。真顔で嘘八百並べ立てるなんて感動もんよ。しかもそれに真実みを持たせられるとは、天職詐欺師だろ？

お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、近衛氏との婚約を解消した訳、知ってるんだよ？それを何が僕次第で、だ。あたし次第で兄ちゃん達に引き渡すつてのが真実じゃん！

こっちにだけ死ぬほどの努力を求めたけど、自分が頑張るつもりなんて爪の先ほどもないくせに。

ばらしてやる！ホントのこと言てやる！…って気合いは、振り返った近衛氏の絶対零度の視線で霧散した。

曰く『口を開いたら殺す』って無言の脅し。

…お願いします、初めて会った頃程度の意地悪で勘弁して下さい。

あんたの本性丸出しは苦手通り越して怖いんです。

あたし、選択間違えたよね、絶対。

果てしない後悔の海に沈み込んでるこちらを無視して、近衛氏は優雅な微笑みのまま、兄退治に手をつけようとしていた。

狙いを定めたのは、ひきつった大嗣さん。

「早希さんが兄さんに悪いことしたって、ずっと言ってたよ」

いえ、全く全然思っていないです。むしろすっきりしたくらいで。

「僕しか考えられないのに、兄さんが『結婚してやってもいいよ』なんて言うから動揺して思わず叩いちちゃったって。許してくれるよね？」

うまいなあ。あたしがどの辺りで怒ったのかちゃんと指摘しながら、こちらに悪意はなかったって周囲にさりげにアピールしてるよ。おば様なんかすごい目で大嗣さん睨みつけてるもんね、口が達者で性根の曲がった、嫌な弟だねえ。

感心しきりで二人を眺めていると、降参した大嗣さんがあたしに向き直って頭を下げた。

「すまなかった。随分尊大な物言いをした」

まず一勝。ぴくぴくしてる頬は気になるけど、怒りの要点がわかってもらえたならそれでいい。

和解のハンドシェイクで悔しそうな大嗣さんと仲直りしてる隙に、近衛氏のターゲットを変えている。

「将彦兄さんは登場が悪いんだよ。僕たちが話してるの盗み聞きはまずいでしょ」

うん、大嗣さんも同罪だけどね。ここで硬直してるからわかってるでしょ。

「それにいきなり手の甲にキスはないよ。早希さんは兄さんみたいに女性慣れした男の人に会うのが可哀相なくらい、純粹で擦れてないんだから、驚いて当然じゃないか」

ピクリと上がったのは、お祖父ちゃんの眉。

将彦さんは必死に言い訳を捜そうと口を金魚みたいにしてるけど、無駄ね。

近衛氏の言い方は、お祖父ちゃんに将彦さんを女にだらしのない人物と思わせる可能性が大だもん。いや、あの顔は断定しちゃった感じがな。

「ごめんね、次からは気をつけるよ」

しゅんとしちゃった将彦さんは、ちょっと可哀想だった。

話術一つで兄二人とお祖父ちゃんを黙らせた近衛氏って…敵に回すのは止めよう。あたしなら、命の危険が襲ってくるに違いないもん。まだ、生きてたいです。

「早希ちゃん、上二人の失態は謝るわ。でも、本当にこれでいいの？」

手駒のできの悪さにあからさまな失望を見せつつも、おば様は近衛氏に騙されてはいなかった。

さすが母親と言うべきか、近づいてあたしの手を取りながら本気で心配そうな顔して小声で囁くんだもん。

「あの子、タチが悪いわよ。兄さん達を陥れた巧妙さは誰彼構わず発動するんだから」

知ってますう…、ってか既に被害者ですう。

この際おば様に洗いざらいぶちまけて、この男の性根をたたき直してもらおうかなんてチラリとでも考えたのが悪かった。

声に出す前に後ろから抱擁という名の拘束を受けたあたしは、大切なチャンスを横から攫われてしまったのだから。

「お母さん、人聞きの悪いこと早希さんに吹き込まないで下さい。僕の努力が無になるじゃないですか」

してないじゃん、欠片も！こういう奴に限って地獄耳って、神様人が悪いよ。

善人は圧倒的に不利だ。抜け道さえありゃしないっ。

「ね、早希」

…惚れた弱みってやーよね。

綺麗な顔に浮かぶ悪魔の微笑みにさえも、思わず心臓が高鳴っちゃうんだから。

「これでいいです…」

泣き笑いになりながら、おば様に頷いたあたしは、世界で一番のバカ者かもしれない。

あの日から、3日と開けずにあたしは近衛氏の家に通ってる。

そりゃあもう、彼の関心を引く為に涙ぐましい努力をしながら長い通学時間の合間を縫って、ただひたすら愛しい近衛氏に会う為に…。

って、そんな訳あるか!!

脅されてんのよ、あの極悪人スマイルで!

「僕はね、社会人なんだよ。学生と違ってとーっても忙しい毎日を送ってるんだ。その僕がだよ、貴重な時間割いていて君に会いに行くななんて時間の無駄だと思わない? 惚れた弱みって言うじゃない。だから来るよね、毎日」

行けるかーっっっ!!

家から30分の道のりを通うんだぞ、いくらお祖父ちゃんが平沢さんごと車賃してくれたって、学校には宿題やテストだってあるんだから余分な時間なんてないんだ。

…でもね、それを言ったらさ。

「じゃあ、住む? 僕の部屋に」

可愛らしく聞かれてもね…せめて家って選択はできないもんでしようか。

一足飛びにあんたの部屋って大人の常識からして、どうなの? 力抜けるわ、ホント。

「今日も遅いわね、バカ息子は」

並んだ食器を前に、お婆様は申し訳なさそうにこちらを見る。

学校から直行すると丁度ご飯の用意をする時間になるもんだから、花嫁修業も兼ねてあたしはお婆様と食事を作るのだ。

この家では家政婦さんの仕事は掃除と洗濯で、食事の用意はお婆

様がするのが常なんだそう。その庶民感覚は大いに同調できるから、お母さんとそうしていたように並んで台所に立つのが習慣になってしまった。

仕事してる男どもは7時を回らないと帰ってこないしね、暇つぶしと親交を深めるため、結構時間の有効利用なんだよ。

「もう馴れました。それに隆人さんにいじめられてるより、おば様と話してる方が何倍も楽しいですから」

「あら、そう？」

にっこり笑った顔が本当に嬉しそうで、こっちまでつられて笑顔になる。

実際、一日おきに通ってるこの家で最も長い時をおば様と過ごしていた。

おかげで近衛氏の悪行三昧、たーっぷり報告できたし、あれと25年付き合ってきたおば様もわかってる分、あたしの感情にシンクロしてくれたりで、近衛氏とより仲良くなっちゃったわよ。あはは。「そうだ、早希ちゃん宿題やっちゃったら？」

リビングのソファーに置きっぱなしになってるカバンを思い出して、あたしはおば様のありがたい申し出に顔が引きつるのを自覚するんだ、これが。

できるなら忘れていたかった…今日はしこたま数学の課題を出されていたんだっけ。

よりによって大っ嫌いな数字の羅列。

帰ってからって言いたかったけど、おば様気を遣ってくれたんだよね。自分のナイスアイディアに至極満足そうに頷いてるしさ。

「…じゃあ、お言葉に甘えて」

無駄話してる方がなんぼか楽しいけど、そうしていたところであいつらが消えてなくなる訳でなし、ここは一つ諦めるのが身の為とヒラヒラ手を振るおば様を後にリビングに向かう。

しかし、自力で何とかなるのか？どこがわからないかもわかんないような教科相手に。

…あの様子じゃお婆様は教えてくれないんだろうなあ。困ったなあ。分厚い教科書と、真っ白なノートを前に考えることさえ放棄したあたしは固まっていた。いつもは平沢さんに教えてもらうんだけど、今日はお祖父ちゃんに呼ばれて帰っちゃったし、うーん。

「何をやってるんだ」

不毛な思考を破って、ひょいっと覗き込んできたのは大嗣さん。

「びっくりした！脅かさないで下さいよう」

いつの間に帰ってきたんだか、気配もさせずに近寄るなつてのよ。ネクタイを弛めながら努力の跡さえ見えないノートを取り上げた彼は、バクバク言ってる心臓をなだめているあたしに、冷めた一瞥をくれてよこした。

「これは、やってないんじゃないかってどこか」

「…苦手なんですよ」

ええそりゃもう、他の教科も決して得意じゃありませんが数学は特に、ね。

悔し紛れに言い訳してみたのに、頭上からは盛大なため息。

通ってみてわかったけど、ここの家の人達は他人に厳しいのよ。自分にはもつと厳しいみたいだけどね。

こりゃまた、努力が足りん！とか叱られるんだろうなと、覚悟した上からは、予想外に親切なお言葉が降ってきた。

「どこがわからないのか考えておけ。着替えたら見てやる」
ををっ？教えてくれるの？

返事も聞かずに出て行った大嗣さんは、あの日以来いい人の仮面を付けなくなった尊大な態度だったけど、近衛氏よりはわかりやすい親切をくれる。

そう何度も遭遇した訳じゃないけど、さり気なく食事の片づけを

手伝ってくれたり、お茶を入れてくれたりと気配り上手なのよね。
さすが、長兄。

わかんないところか…教科書1ページ目からって言ったら怒るんだろうな…。

とはいえ嘘ついたってどうなるもんでもないから、リビングに戻った彼に正直に白状したらば、意外にも懇切丁寧な説明が返ってきた。

「公式は覚えてるんだ、応用は数をこなすしかない」
やってる自分がイライラするくらい同じ場所で詰まってるのに、大嗣さんの気は長い。

怒りもせず繰り返し説明をしてくれるんだもん、近衛氏の数倍はいい人よね。

「バカは努力で直すしかないぞ」

…鼻で嗤う、この辺は血の繋がりを痛感するけど。

「できたー!!」

普段の倍の早さで、強敵数学は撃沈した。

「毎日繰り返しよ」

疲れ切った大嗣さんも撃沈寸前で、それでも笑顔でいられるなんて偉い。

お姉ちゃんにもよく教わったけど、あの人气が短いから怒鳴るわ喚くわ、仕舞いには投げ出すわで最後まで側にいてくれた事なんて皆無だったもん。

実の姉でもそれなのに、赤の他人にここまでできるなんて人間ができてるのか年の功なのか、ポイント高いぞ。

格好いいな、大嗣兄ちゃん!

「教えるのうまいですね」

教科書をしまい込みながら言うと、ちょっと顔をしかめた彼は将彦がなあと呟いた。

「お前なんてもんじゃないんだよ、今説明したことも聞き返してくる鳥頭で、そのくせ諦めが悪いからしつこくて。あいつに教えてるうちに忍耐が身に付いたんだな」

ああ、わかるーつと頷いちゃうのは失礼なんだろうけど、妙に納得。

「隆人さんには教えなかったの？」

「あれが俺に弱みを見せる人間か？」

誰にも見せないな、きつと。

お世辞にも弟達を褒めてるとは言い難い口調だけど、その顔は優しく暖かいんだもの、可愛がってるんだね、二人を。少しうらやましくなるくらい。

「隆人さんと結婚したら、あたしのことも大事な妹にしてくれる？」

大嗣さんの懐の中は居心地がいいんだろうと思ったら、ついそう声に出していた。

身内として護ってもらうのは気持ちがいいに違いない。態度はLでむかついたこともあったけど、長年染みついた兄としての習性から来てるならしょうがないと納得できる寛大さもこの人の中には共存してるんだ。

断られたらどうしようなんて考えていたのに、大嗣さんはあたしの髪をかき混ぜながら嬉しそうに微笑む。

「当たり前だ。大事な弟の嫁さんならそりゃあもう猫可愛がりしてやるぞ」

そこでふっと考えた彼は、余計な一言も付け加えてきた。

「俺と結婚するって言うならもっと可愛がってやるけどな」

ニヤリと上がった唇に、頬が引きつる。

この間の一件であたしには愛想尽かしたんじゃないの？ いーえそれより近衛氏は怖くない訳？

冗談だよねって見上げた瞳は人の悪い光を宿すばかりで真意が掴めない。

さて、どう返したのかと考えあぐねている時、背後に漂う邪悪な気配。

「兄さんと2人で、楽しそうだね？」

ぎゃーっ！何その地を這うような声は？！近衛氏、近衛氏よね？

音がするんじゃないかってくらい硬い動きで振り返ると、そこには小首を傾げて佇む天使が：目が据わってるよ、あんた！

「遅かったな、隆人」

気にする風もなく声をかけた大嗣さんは邪悪な波動もなんのその、不機嫌マックスの弟に歩み寄るとポンと肩に手を置いて、ニヤリ。

「誰かさんが僕に仕事を押しつけて帰ったからでしょうに。空いた時間で早希と何してたの？」

「数学を教えてただけだよ。な？」

振らないで！冷戦はそこだけでやって頂戴！

傍目には仲良く会話してるようだけど、二人とも目がギラギラしてて怖いんだって。

微かに頷くことしかできないあたしなんて見ちゃいない。

お互いに威嚇の視線でにらみ合いながら、恐怖の会話は続いている。

「殴られた時は腹も立ったが、話してみるとなかなか可愛いじゃないか、あれは」

「人の物あれ呼ばわりしないしてほしいな」

「まだ、お前のものじゃないだろう？俺も、もう一度参戦するか」

「敗者はおとなしくしてるものでしょう」
「家にそんな性格の人間はいないのは、知ってるだろ？気を抜いてると攫ってくぞ」

高笑いしながら退場した大嗣さんによって心臓に悪い話は一応終止符が打たれたんだけど、やばい空気はそのまんま。どこるか矛盾

が残された人間に限定されちゃった分、身の危険を感じるのは何故？

「…早希？」

視線で人が殺せるなら、あたし死んでる。ヒットポイント0よ。
ゲームオーバー。

なのに更にとどめを刺そうと、近衛氏の怒りの波動がずんずん近づいてくるわけで。

数歩で殺傷距離まで来た彼は、両手であたしの顔を固定すると強制的に氷の視線とかち合わせた。

「兄さんに勉強を教わるの禁止ね。君の面倒は僕が全部見るから」
いえ、それおつかないからいやですう。

「恋を始める気があるなら、裏切るなっていうたでしょ？僕は兄さん達に早希をあげる権利を持つてるけど、君に選択権はないんだよ」
うーわー、めっちゃめっちゃ横暴。人間には基本的人権があるはずなのに、あたしには認められてないっての？

…って声にできるはずもなく、震える返事をするのが精一杯だった。
激しく間違ってる気がするな！。

「じゃ、食事にしようか。母さんが呼んでる」

全面降伏がお気に召したのか、近衛氏は手を離すとあたしを解放してくれる。

やれやれ、こんなの選んじやった自分が恨めしな。大嗣さんの方がマジお買い得じゃん、近衛氏の忠告聞いとけばよかった。

緊張疲れで重い腰を上げると、先に行ったとばかり思っていた彼は振り返ってあたしを待っていた。

こういうさり気ない優しさに騙されたんだよね、わかってるんだけどさ、嬉しいからバカだ。

浮かれた気分でへろへろ近づくと、近衛氏は先に立ってドアまで開けてくれた。

いーなー、女の子扱いされるって。

「早希は一人にすると、兄さん達と仲良くしちゃうみたいだからね。ずっと側にいてあげるよ」

：普通、喜ぶべき言葉だね、これ。でもさ、なんでだろまずい気がすんの。

監視付き？この先ずっと監視付き？！

監視付き…。

宣言は形だけじゃなかった。

イヤってくらい早く帰ってくるのよね、ここんところ。思わず、仕事はどうしたって聞いたならば、

「優秀な兄さんがやってるよ」
って。

あんたの報復はどうしてそう、陰険なの？

兄さんて絶対大嗣さんじゃないよ。将彦さんはいるんだからさ、家に。

「そこ違ってる。なんで同じとこで間違えるのかな？」

近衛氏のプライベートルームにて現在：7時。始めてから既に1時間が経過してる数学の復習は、一向に成果を上げることはない。

ソファアの置かれた部屋の隣、寝室になっているここには普段彼の使っている大きな机がある。

どこからか引っ張ってきた木製の豪華な椅子を机の真横に貼り付けて、尊大にふんぞり返る近衛氏を見てると、部屋のシチュエーションでものが気にならなくていい。

普通はさ、ベッドがでんと構えてたら警戒するのが常識じゃん？

でも、この人ね、1日おきに通ってくるあたしを捕まえて、数字で殺そうって魂胆らしいの。

食事の用意してるの無理矢理引っ張ってきて監禁してさ、鞭でも使うような勢いで叩き込むのよ方程式。

オーバーヒート寸前のあたしは、優しかった大嗣さんに思いを馳せた。

言動の是非はともかく、彼に教わった時はスラスラ解けた問題が、

近衛氏になってから亀の歩みほども進まないってのは問題よね。
あんた教師には向いていない。絶対。

「上の空だね。お仕置き考えなきゃ覚えられない？」

ぼけっと中空を見つめてたあたしの視界に、サタン降臨。

今、お仕置きって言った？何、その時代錯誤な言葉！

「全然全く必要ないです！頑張りますんで…」

どんな事されるのかわかったもんじゃないから慌ててノートに向かい合っちゃったわよ。

うおう：数字怖い。

でも、この男の方がもっと怖い。：あたしこの人のどこが好きなの？日に日にそんな疑問が沸いてくるよ…。

「うん、もう面倒くさいし頑張らなくていいや。教科書と見つめ合ってもできないでしょ？」

突然投げやりになった大王様は、立ち上がりあたしからシャープペンとノートを取り上げると、鎮座するベッドを意味ありげに流し見た。

「学校辞めちゃいなさい。僕の子供でも産んだ方が君の為になる」
それかー！それがお仕置きかー！！

首が落ちるんじゃないかってくらい激しく振りながら、逃げ道を模索するあたしを見るのは本当楽しそう。根っからのサド…。

「勘弁して下さい、真面目にやるから、死ぬ気で覚えるから！」
懇願するのに極上スマイルは崩れない。どころかジリジリ距離がなくなってるし。

悲しいかな、後退しても椅子の背もたれが壁に阻まれて後がない。
近くに扉もないと来た日には、どこへ逃げればいいのかやら…。

「大嗣兄さんに教わった時は、随分すんなりできたんだってね？」
ぶつかり合った膝に動揺する間もなく、威圧的に見下ろす近衛氏

は豹変の理由を吐露した。

そんな自分の無能をあたしにぶつけられても：比較対象が兄ちゃんになると人変わるんだからなあ。

「人間には、向き不向きがあるじゃない」

励ますつもりで不用意に口にした言葉は、火に油注いじやったらしい。

ずっと細められた近衛氏の目が、嫌な光り方したもん。：地雷、踏んだ？

「僕に勉強を教えるのは、無理だって言いたいんだ」

「めめめっ滅相もございませーん！！」

変わった声のトーンに全身チキン肌化しちゃったら、逃走！

右は机が邪魔してるけど、左はフリーだから近衛氏をかいくぐって行くのも不可能じゃないはず：だったのに目の前にニュツと現れた彼の腕があたしの動きをせき止めた。

「逃がさないよ。早希に教えてあげなくちゃいけないからね」

耳元で囁かないで、おねがいだから。

ときめくほど近くに好きな人がいるはずなのに、何故冷や汗が流れるのかな。

ってか、数学教わってたはずなのにこの展開って理解の範疇越えると思わない？

無駄に広い部屋の中、隅に固まって硬直する女と、追いつめて楽しむ男。

階下には、おば様だって将彦さんだっているのに全く意に介さない強引野郎に身の危険をひしひし感じつつ、この先を考えることさえできない。

「こっちを向いて」

胸焼けしように甘い声に諦めを悟った。

だめだ、こいつの気が済むまでは解放されそうもない。

おとなしく従いながら次のチャンスを探う方が、余計な体力を使わなくて済む。

音がしそうなくらいゆっくりと近衛氏に向き直ると、予想以上に近くにあった顔は唇が触れそうだった。

吐息のかかる距離、音が消えたような世界、恋愛に夢いっぱい抱いちゃってるあたしとしてはこの上なく流されそうなムード。

いつになく柔らかな表情で、綺麗な顔に微笑みまで浮かべられた日には…まづいなあ。

「早希…」

囁き声が呪文のようにあたしの体を縛った時、邪魔か助けか陽気な叫びが響いた。

「ふたりとも、食事だよ！」

家でもラフなスタイルを好まない、優男登場。

至近距離で近衛氏が舌打ちをするのが聞こえる。

「兄さん、ノックって知ってる？」

怒りを隠そうともしない弟に、全くめげることのない将彦さんはオーバーに肩をすくめると、したよつと笑う。

「そりゃあもう、僕の繊細な拳が腫れ上がるほど叩いたのに、返事をしないから入ってきたんじゃないか」

あー…気がそがれるなあ…反論するのもバカらしいくらい自分の世界だなあ。

オーバーアクションに加えてナルシスト入っちゃってる将彦さんは、用もないのに前髪を掻き上げると一人ポーズを作ってる。

脱力してるのは近衛氏も御同様らしくて、無言であたしから離れると振り返りもせずに部屋を出て行った。

取り残していかないでよ、こんな奇妙な生物と一緒にさ。

「やれやれ、相変わらずよくわからない弟だな」

己を顧みたことはないらしい将彦さんは、去りゆく近衛氏を見送った後、ステージの上のスター顔負けの仕草であたしに手を差し出した。

「では、参りましょうか？お嬢さん」

輝く微笑みも、時に頭痛の種にしかならないことを知った瞬間だった。

…近衛氏がまともに見えるようじゃ、あたしもお仕舞いね…。

近衛氏は食事中も静かでね、その後もあたしのことなんか振り返りもしないで出てっちゃったから、不思議な展開になってるの。

聞いて驚け、将彦さんと食後の紅茶だぞー！！

…想像するだに、頭抱えちゃうでしょ…？

「随分静かなんだね、早希ちゃん」

日の落ちた庭園で、むせ返るバラの香りに包まれながら芸能人顔負けのオーバークションと、一応見合った美貌。

裏舞台を知らなかったら、うっとりしないと失礼なシュチエーションなんだけどさ、おば様情報だとバラ園は将彦さん専用で、彼が自腹を切って造って尚かつ普段の手入れも本人がしてるんだと。

くそ暑い真夏でも三つ揃いを離さない優男が、麦わら帽子に長靴で庭仕事だよ？ 笑う通り超して啞然呆然、自分を演出するためにそこまでするのは頭が下がるよ。

だからさ、おとなしいんじゃないかって感慨にふけてたの、あたしは。

「何て言うんですか…バラの香りに哀愁漂うと言うか、侘びしさ感じてるんです」 お金持ってるんだから、庭師くらい雇おうよ。

優雅にカップを口に運ぶ将彦さんのナルシーぶりに悲しい目を向けるんだけど、本人は全く気付いてないみたいでさ、

「乙女の感性は、やはり鋭いんだね」

と微笑む訳。あなたの努力に切なくなってるんだよお、気付いて。

頭上に漏れる光の中で、全く心配してない近衛氏が見える気がする。

大嗣兄ちゃんと一緒のあたしを異常なまでに嫌がるくせに、将彦

さんがお茶のお誘いをかけて来た時、無言で2階に上がった彼の心情が手に取るようだ。

どれだけ一緒にいても、将彦さん相手じゃ恋愛感情がわかないって…。

「暗くなってしまったけれど、明かりが届く範囲の花だけでも見て回らないかい？」

あたしの感想にすっかり気を良くした将彦さんが、テーブルを回り込んできた。

全身にラメでも被ってんじゃないかってくらい、歩く彼の後ろにはキラキラ目映い輝きがくつついてくるの。

錯覚、幻想よ、しっかり早希！

「さ、お手をどうぞ」

差し出された手のひらを無視する訳にもいかず、あたしはそっと指先を乗せた。

意外にもヒヤリと冷たいその感触に、心地よささえ覚えてしまったのは不覚よね。

だって将彦さん、さすがに気障を自称するだけあって、エスコート上手なんだもん。

手を繋いで回るのはちよっとって考えを読み取ったように、軽く曲げた肘にあたし指を導き、ゆっくりとした歩調で歩き出す。

コンパスの違いでついていくのに困ることがないよう、きちんとあたしの歩幅に合わせてね。

悪かったわ、ナルシーなんてチラリとでも考えて。あなたはちゃんと紳士だわ。

「手前にはいつでも楽しめるように、四季咲きのバラを集めてあるんだよ」

生い茂る緑のなか、淡い照明に浮き上がる色とりどりの花たちは、よく見かける八重咲きのゴージャスさんからお目にかかったことのない花卉の少ないモノまで本当に豊富で、世話をしてる人の愛情が

感じられる。

「この白い花がアイスバーク。別名白雪姫の名をもっている。そっちの藤色のバラはブルームーン。カップのようなピンクのプリティジェシカ。ホワイトクリスマスにほら、あのクレマチスに似たムタビリスは咲いている花の色が変わるんだ。あじさいみたいだろ？」

嬉しそうに花々を紹介していく将彦さんは、子供みたいにピカピカの笑顔で、微笑ましくて、このバラ園は彼の演出のために造られたんじゃないかって確信をあたしに持たせた。

「バラ、好きなんですネ」

途切れた説明にぼつりと声を乗せると、将彦さんは幸せそうに頷く。

「ああ、美しく、気高く、そして強いんだ。品種改良されたモノは害虫や病気に弱いんだけど、原種は華やかさで負けても強さとその可憐さで目も心も楽しませてくれる。日本人も多くの品種を作り出しているし、ハマナスは原種としてあまりにも有名だしね」

オタクの域に入っちゃってるけど、憎めないなあ。花好きに悪い人はいないって言うし。

「それでローズガーデンを作ったんですか？」

「庭に植えたのは、僕が切り花が嫌いだからだよ」

意外な言葉にあたしは将彦さんを見上げた。優しく花卉に触れていた彼は、僅かに赤くなつた目元を隠すように闇に視線を移すと、こちらを見ることなく言葉を紡ぐ。

「枯れ落ちるまで僕たちに安らぎをくれる花を、人の手で散らせてしまうなんて最大の罪だ。朽ちた花は次の世代をはぐくむ糧となるのに、その機会さえ奪ってしまう切り花が僕は大好きなんだよ」

どうしよう…今まで一度も思ったこと無かったけど言いたい、これは彼に言わないと。

「将彦さん、かっこいい…」

お馬鹿だけど、マジで頭痛を覚えちゃうパフォーマンスをしちゃうけど、この人いいじゃない。兄にも弟にも一歩もひけをとらないいい男だったんだわ。

麦わら帽子も長靴も、むしろそのギャップが素敵よ！

夜の闇に騙されたのか、むせ返る香りに酔わされたのか、この際どっちでもいい。

花に優しい男、ブラボーよ！

「じゃあ、僕の妻になるかい？」

「……」

いやあ、前髪掻き上げて白く輝く歯をちらつかせられても…そう来るのは間違い。

飛躍しすぎないようにと、嚴重注意を促そうとした時だった。

覚えがあるわ…この冷氣、この殺気。

全力で逃げてみたら捕まらずにどこまで行けるかしらね…。

「兄さん、そろそろ中に入らないと蚊にくわれますよ」

ムードにそぐわない、それこそどうでもいい忠告で将彦さんを牽制した近衛氏は、腕にかけられたままだったあたしの手を乱暴にひったくると、絶対零度の微笑みで周囲を凍り付けにした。

「ゆっくり話をしようね、早希」

有無を言わせぬその威力、最近頻繁に降臨する恐怖の大王は動けないあたしを引きずって、ずんずん室内に入っていくのだった。

第一級警戒警報発令、少女が一人絶体絶命。

有無を言わず和室に引きずり込まれ、洋館にこんなところがあったのかと感動する暇はない。

近衛氏の貼り付けたんじゃないかって笑顔は、バラ園で見た時と変わらないの。

そりゃあもう、アロナルファで固めたんかってくらいにね。

「座ったら？」

猫撫で声ってこれかあ…。

この人と会ってから字面でしか知らなかった言葉を随分実体験させてもらった気がする。冷徹でしょ、驚愕でしょ、豹変でしょ…ろくな言葉無いじゃない。

「早希？」

突っ立て現実逃避を決め込んだあたしを促す夏向きの声は、悪寒と共に脳の命令形態を支配して、体の力を奪い取っていった。

崩れるようにへたり込んだ場所は、近衛氏からほんの一メートル弱。

しまったあ…咄嗟に逃げられる距離は確保しなきゃだったのに、野生動物の掟を破っちゃった。

しかし、こちらの心情などお構いなしで至極満足そうな近衛氏は、相対したあたしを流し見るとにこやかに恐怖の宣告を下した。

「もう、家に来なくていいから。僕が早希の家にお婿に行く」

時間がね、止まったの。

ぴしーって音立ててね、止まったの。

声を失ったあたしなんて気にかけることもなく、悪魔の計画は露呈され続けた。

「恋愛は結婚してからでもできるでしょ？せっかく女性を信賴しても

いいかなって思い始めたのに、ここにしていると気が休まらないんだよね。過去が過去だけに、兄さん達に油揚げって事になると僕立ち直れないだろうし。二人の目が届かないように、ここへの出入りを禁じたら母さんの機嫌が悪くなる。早希の家に通い詰めれば、ロクでもない噂が出るんだろうから、いっそ結婚したら丸く収まるんだ」果てしなく自分本位の演説は近衛氏らしいけど、全く笑えない。

「あなたはあたしを、全然信用してないって聞こえたんですが…？」兄ちゃんズがどうあれ、あたしがしっかりしてれば済むことだと思っただよね。

家族のように接すれば、仲良く話してようが、どつき合っようが、恋愛感情が生まれるなんて皆無でしょ？

世の中には報われない片思いなんてのもあって、将彦さん辺りとはとことん酔っちゃいそうなシチュエーションだけど、一人でやる分には猿芝居。相手がいなきゃ恋愛はできない。

その辺は信用問題に発展しちゃうんだけど、意固地に凝り固まってる微笑みを見る限り、近衛氏にはその余裕が見受けられなかった。彼の過去には同情するよ、でも先の事も考えればこれは充分話しかって然るべき問題だね。

一方的にあんたの思い通りになんてなるもんか！

「早希を信じてないんじゃない、女性全般を信じてないんだ」

「尚悪いわ！」

あたしをその中の1人と認識してる時点で失格だっつーの。

これはもう恋愛云々以前の問題じゃない、人としてよ！

「近衛氏、信用できない人と仕事するの？」

いきなり質問を振られて少し驚いたらしいけど、すぐさま意図を理解した彼は首を振った。

「仕事と恋愛は関係ないよ」

「大あり。どっちも根っこは同じだい！」

「全然違う。仕事は僕を裏切らない」

「あたしもあんたを裏切らない！」

「それはこれから、僕が決めることだよ」

うがー！！この屁理屈大王は！！！！

顔色一つ変えずに言うかね、現状じゃあたしを欠片も信じてない
つてめっちゃくちゃ失礼じゃー！

子供みたいな睨めっこをしつつ、頭が煮立っていることを自覚する
と現状がとつてもまずいものだって気付いた。

平行線の話し合いは続けても答えが出ない上、一度上がった熱を
冷まさなくちゃ冷静な判断ができない。

つまり、このまま進んだら取り返しをつかない険悪なムードが出
来上がって、最悪ケンカ別れてことになる。

一方だけが怒るのを、ケンカって言えばだけどね。

「気を許せない相手と結婚なんかした日にゃ、1週間と保たない！」
口が止まらない。わかってるのに言わなきゃ気が済まない。

「僕の我慢が続く限りは、大丈夫だと思うよ」

しれっと言いやがった。この期に及んであたしだけが悪者なの？！
予想通りの悪口三昧は、相手に人生経験がある分圧倒的に不利で、
それが余計にあたしをいらだたせる。こっちが真っ赤になって叫ん
だって、相手の面の皮が厚いんじゃない？傷一つつけられない。

いつの間にか互いの距離が縮まっていた。

手を伸ばせば届く距離から、額がくつつきそうな所まで。なのに
ときめくどころか血が沸き立ってるって、宿敵と対峙してるんじゃない
って。

「我慢なんかしてもらわなくて結構よ！結婚相手ならあんたじゃな
くても…」

「ストロップ！！！」

蹴倒しそうな勢いで開いた襖の向こうから叫びに、そのあまりの大きさに近衛氏もあたしも心臓が一回止まっちゃった。

危ないなあ、死んだらどうしてくれんの。人生まだ長いってのに。同時に睨みつけた先には、大嗣さんに面差しの似た美人が一人仁王立ちしてる。

腰に手を当てゆっくり首を巡らせた彼女はあたしに視線を据えると、庭の薔薇にも負けないゴージャスな笑みを浮かべ、ずんずん近づいてくる。

「はじめまして、早希ちゃん」

小首を傾げた仕草は近衛氏に激似。わかった、妹さん！

3週間近くここへ通ったけど、お目通りできなかった彼女は突然現れて、あたしにそっと耳打ちした。

「口に出しちゃうと取り返しがつかないわよ。ここは任せて」

：その通りでございます。あのままいったらあたし、大嗣さんや将彦さんの名前を出した。それこそ近衛氏が一番嫌がるのに。

青くなったあたしの肩をふわりと包み込んだ彼女は、目の前の魔王に臆することなく口を開く。

「隆人君、早希ちゃん貸してね」

訊ねるのではなく決めつけて、立ち上がらせたあたしの手を引いた彼女は不機嫌に黙り込んだ近衛氏を無視して和室を後にしようとした。

「あの、いいんですか？」

言い合った後放置って、個人的にはすっきりだけどこの人に後々危害が及んだらどうしよう。相手は傍若無人大王なのに。

「気にしないでいいの。隆人君が私に勝てる訳ないんだから。この家は女の方が強いだよ」

イタズラっぽく囁かれた内容は、充分理解できた。

おば様なんて、おじ様や3兄弟を意のままに操ってるからなあ。

末っ子で女の子なんて権力ありそうだ。

「お茶しながら、親交を深めましょうね」

優しく微笑まれちゃったら、聞いて欲しいことたくさんあるって叫びそう。

どうしたって近衛氏には負け負けになっちゃうあたしは、強力な助っ人を得て不毛なケンカから脱出成功って訳。閉まりゆく襖からかいま見た彼は、1点を見つめたまま微動だにしなかった。

「やっぱりお茶を煎れるのは、大嗣兄さんが一番上手いわねえ」

いえ、お上手なのはあなたです…。

リビングのごてごてしたソファーに負けない綺麗なお姉さんは、帰ってきたばかりの大嗣さんを笑顔1つで意のままに操って、美味しい紅茶をまんまとせしめた。

見習うところが山ほどありそうなその手際ったら…師匠と呼ばせてもらおう、うん。

「歌織ちゃんが久しぶりに帰って来たのよう。大嗣張り切っちゃうわよね？」

隣でおば様も楽しそうに微笑んでる。

この人もやっぱツワモノだわ。仕事で疲れてる人間をこき使うことになんの抵抗もありやしないんだもん。

人の尻馬に乗って自分もティータイムとしゃれ込むなんて、大嗣さんがさり気なくあたしにお茶を煎れてくれちゃうのは長年の条件反射だったんだ。

悲しい納得の仕方だなあ。

「大嗣さん、ご飯まだなら暖めようか？」

2人に混じってくつろぐこともできるんだけどさ、あたし1人他人じゃない？

しかも横柄な近衛氏と四六時中一緒にいたせいか卑屈な根性が身に付いちちゃってね、どうにも落ち着けないんだ、これが。

キッチンに移動しようと腰を浮かせたあたしを、まあまあと座り直させたのはおじ様。

おば様にべったり張り付いて言いなりだから、影薄いんだけどいいのね。

「そのくらい1人でできるよ。早希ちゃんはここで、ケーキでも食

べてなさい」

大嗣さんが老けたらこうなるって渋みの効いたロマンスグレーは、おみやげに買ってきた高級洋菓子を皿に取り分けてあたしに差し出してくれた。

大会社の社長様が給仕い？

「あああ、あたしやります！おじ様こそお茶して下さい！」

ここん家の勢力図がわかる一場面だよね…。女性陣はふんぞり返って、男性はかいがいしく働く。

うらやましい通り越して憐れ…。

「歌織ちゃん、見たがってた薔薇が、咲いたんだよ！」

あたしがおじ様を手伝う横で（あくまで手伝い、しきりはおじ様、将彦さんが大きな鉢を抱えて嬉しそうに近寄ってきた。

姿が見えないと思ったら…また薔薇？

「まあ、とっても綺麗ね。でも将彦君、それお日様の元で見た方がもっと輝くから明日ゆっくり鑑賞させて頂くわ」

素敵な笑顔の裏で、きっぱり彼を拒絶した歌織さんは優雅に茶を一口。

やっぱ似てるね、その悪魔スマイル。血って怖いなあ。

軽くあしらわれた将彦さんも馴れたもので、大して気にした様子もなく鉢を部屋の隅に置くと、お茶会に参加すべく空いてるソファに腰を下ろした。

三男は欠席だけど、これで家族勢揃いしたわけで初めて見たけどこれだけ似た顔、綺麗な顔が並ぶと壮観。

この中じゃ凡人は埋没するな、あたしのことだけど。

「ところで早希ちゃん、隆人君のプロポーズ受けるの？」

主題も何もすっ飛ばして、いきなり確信ですかっ？！

すまし顔でさりと云った歌織さんの発言に、何故だか全員身を乗り出しちゃって、

「早まっちゃダメよ！」

「家には他にもお買い得な息子がいるぞ」

「隆人なんかと一緒にいたら、君は若くして散ってしまおうよ！」

「俺と結婚したら苦勞はさせんぞ」

大嗣さん、食事に行ったんじゃないの…？

何よりあなたの方、近衛氏は家族じゃない。何故そこまで強固に止めようとするかな。

「その前にケンカしちゃんだんで…ははは」

この際家族仲は置いといて、取り敢えずは必死の形相の皆さんをなだめることに徹したあたしは、結婚以前に2人の間に横たわってる天の川級の溝について思いを巡らせた。

「隆人君の女性不信が原因なんですって」

ってまた先にばらすの…一体どこから聞いてたんですか歌織さん…。

「思い当たる節があるぞ」

ポンと手を打ったのは大嗣さん。着替えもせずいつの間にか腰据えちゃって、あたしに意味深な視線を送ってきた。

「この間も言い争ってた、あの女のせいだろ」

あー立ち聞きされたんでしたっけね、あの話も。

頷いて肯定すると、大嗣氏に同調して将彦さんも唸り始めた。

「彼女かあ…信頼には全く値しない人だな」

世の女性全てに激甘であろう将彦さんにこう言わしめるとは、近衛氏が結婚まで考えた人ってよっぽど悪女だったのかな。

それより怖いのは用心深い近衛氏が骨抜きにされた、彼女のテクニクか？

「私、あの人嫌い。まだ二人の周りちよろちよろしてるんですって？」

あからさまに顔をしかめた歌織さんに続く兄弟は、いい迷惑だと吐き捨てた。びっくり…近衛氏やめて兄ちゃん達に乗り換えたのは

知ってたけど、話の様子から察するにその後二人に振られて諦めたもんだと思ってた。まさかまだつきまといていたとは：根性入ったストーリーみたいないひとだ。

地位や財産は、自分のプライドを捨てても欲しいものなのかねえ。捨て身になれる執念に感心してると、おば様が申し訳なさそうにこっちを見てるのに気づいた。

同情されてるのかな？それにしては謝罪光線が出てるような気がするぞ。

「どうかしました？」

思い切って聞いてみると、おじ様とアイコンタクトして二人して頭を下げられちゃった。今の会話の中で2人が悪い所なんてあったかな。

「ごめんなさいね。早希ちゃんにあげるって言った息子に、余計な虫がついてて」

いや、虫ってそんな。

「早いところ手を打って片づけておけば良かったんだが、いかんせんしつこくてな」

かたづけるって物じゃないんだし。

「いっそ圧力かけて、日本にいられないようにしたらどうなの」

歌織さん、物騒ですからそれ。

「適当な男あてがって、消えてもらうか」

それは相手が気の毒ですって大嗣さん。

「僕、お金出せば一人二人は始末してくれる人知ってるよ」わあー！キアラ違うって将彦さん！！

なんなんだここん家の人は！日常会話じゃないでしよが、物騒な。

人の人生潰すほどの大事とは思えない常識人のあたしは、大慌てで見も知らぬ女性のフォローのため頭を働かせる羽目になった。

なんで前カノのために必死にならなきゃならないんだあ！！

「愛は障害あった方が燃えますから！」

……我ながら陳腐。拳固めて熱弁ふるうには恥ずかしすぎる台詞だ。

「愛！そうね、韓国ドラマも障害いっぱいだね！」

え、乗るの？乗っちゃうの？

アホなこと言ったと真っ赤になってるあたしの手を握って、おば様は目をキラキラさせている。メロドラ、好きなのね。

泣きそうになっちゃってるあたしに、小声で囁いたのは歌織さん。

「せっかく邪魔者排除するチャンスだったのに」

怖いから笑顔で言わないで。

あなた近衛氏にそっくりです…。

華やかなメンツと会話の一致しない恐ろしいお茶会は、波乱ありまくりでまだまだ続いていた。

とびとびの話から読み取れたのは（話題が変わるのよ、ひっきりなしに）歌織さんがいなかったのは道楽のピアノがコンクールで好成績残したせいで、有名な音楽大学に留学してたからってことと、大嗣さんと将彦さんがあたしと結婚する気になった訳。

隆人さんの邪魔するのが面白いのと、お嬢様は見飽きたからだそう。

似たような台詞を、遙か昔に聞いた気がするのは何故かな…。

兄弟そろって人を珍獣扱いしてんじゃないっての！

「まあめばしい女は財産目当てか、お父様に勧められてって言うかな」

ようやく着替えてきた大嗣さんは、ケーキをほおぼりながら出会った女性達を思い出して顔をしかめてる。

金持ちは普通の恋愛できない環境なのかっ？！今時、親の勧めに従って結婚決める女がいるとはおそれるよね、こりゃ。

「個人的には女性みんな好きだけど、出会ったことがないタイプを落としてみたいと思うのは僕の本能なんだ」

そんな腐れた性根は捨ててしまえ。

お話にならない将彦さんはおいといて、取り敢えず二人とも真剣に惚れた腫れたで結婚の二文字を出してたんじゃないことはよくわかったわ。

どいつもこいつも、ため息誘ってくれるじゃないの。

この人達も近衛氏と同じく、女性に恨みでもあるんですかね。

「全く、家の男共ときたらそろいも揃って唐変木ばかり」

あたしの心中を代弁するように、盛大に肩をすくめた歌織さんが言い切った。

そう、そうなんですよお。

近衛氏といい、こいつらといい、人の一生に責任を持つとか、相手に尊敬と思いやりを示そうとか考えてる人いないの。

嫁をもらうのと、骨董市で掘り出し物を見つけるのが同列にあるって価値観は、どう転んでも理解できない代物なんだから。

激しく頷いて歌織さんに縋る目を向けたあたしに、彼女はにこりと笑ってみせると不満げな兄達を一掃すべく冷たい視線を送った。

「早希ちゃんはまだ16なのよ。夢も希望もいっぱいのお嬢さんに面白いから付き合えだの、変わり種だから退屈しないだの面と向かって言う人がありますか。プロポーズは形から入るものよ。大嗣兄さんなら宝石店ごと買い占めてくるとか、将彦君なら庭の薔薇を一本残らず切って捧げてみせるとか、それなりの誠意を示さなきゃ」
：気のせいかな？ 誠意の示し方が、果てしなく間違ってる気がするのは…。

形から入られても嬉しくありません。気持ちから入って下さい。

ピカピカの石だの、処理に困る切り花の山だの貰っても困るだけです。

しかし、困惑顔のあたしを無視して歌織さんの演説は続くんだな、これが。

「嘘でもいいのよ、オッケーをもらうまでは相手を大事にしてる素振りが大事」

嘘は…いやだなあ。

「彼女の望みを徹底的にリサーチして合わせるの」
恋愛に興信所は必要ないような…。

「好みの男になりすまして、胸焼けするくらい甘い言葉を囁いて」
作りもんじゃないですか、それは。

「結婚したらこっちのものよ、愛はその内生まれるわ！」

生まれないって。

誰かー、助けてー。救世主だと思った人は、近衛氏以上の悪魔でした！

しかもそれ、本人の前でばらしてどうする。見てみなくて、兄ちゃんズもご両親も固まっちゃってるじゃないの。

末っ子の悲しさか、近衛氏を越える見事な性格なのに詰めの甘い歌織さんに頭痛を覚えたあたしは、痛むこめかみを指で押さえて諦めにそつと首を振った。

ダメだ、この人達。

どれをとってもまともな所がありやしない。金持ちだったっていろいろいるだろうに、よりにもよってこの家に当たるとは…あたしって運がないんだ、きつと。

得意げにふんぞり返る歌織さん見てると、近衛氏とケンカしてるのがバカらしくなってきた。

信頼の1つや2つなんだって言うの。少なくとも彼は恋愛する努力はしてるし、何を企んでたとしてもそれを他人に悟らせるようなドジは踏まないじゃない。

上手に騙されるなら本望よ。選択の余地のない結婚なら近衛氏とするのが得策。

「そうかあ…。早希ちゃんと結婚するには、手順がたくさんあるんだねえ」

そこー！納得して頷くんじゃない！

策を聞いた以上、どんな搦め手で来たって落ちるわきやないでしようが！

「嘘は得意じゃないんだが、面白そうなゲームだな」

得意じゃないならつくなー！！

そう言うのは弟に任せとけばいいのよ。近衛氏は生まれつき上等な二枚舌を所有してんだから。

「ちょっと、3人とも…」

怒りに体を小刻みに震わせるあたしに気づいたおば様の警告は、しかし誰も正確に理解することができなかった。

「ほら、早希ちゃんも喜びにうちふるえてるわよ」

「そうか。よし、明日好きなだけ宝石を買ってやるからな」

「うーん、花を切るのはやっぱり僕の主義じゃないから、花屋を一軒プレゼントではどうだろう」

「いらんわ!!」

とうとう怒りを爆発させたあたしは、辺り構わず怒鳴り散らしたい欲求を抑えてギロリとアホ家族を睨みつけた。

「小手先の策を弄す暇があったら自分を磨け! 心は高価な商品で買うんじゃないくて、熱い思いで動かすのよ! あんた達と結婚するくらいなら、明日にでも近衛氏と籍を入れてやる!!」

肩で息しながら宣言した声を、支持する拍手が聞こえたのはこの時。

計算ずくのタイミング、背筋の凍る間の良さ。

…今、勢いに乗って絶対言っちゃいけない一言、声に出さなかった…?

ギギギギッと効果音がつきそうなくらいぎこちない動きで振り返った背後には、満面の笑みを浮かべた近衛氏が…。

「しっかり聞いたからね、プロポーズの返事」

固まるあたしに歩み寄りながら、誇らしげに掲げて見せた薄っぺらい紙には近衛氏の署名捺印が輝いている。

茶色い文字で書かれた『婚姻届』の3文字がなんと目に痛いことか。

「弾みで言っちゃった…ってだめ?」

上目遣いに可愛らしく聞いてみたんだけど、だめつとにべもない返事。

「宣言通り明日籍を入れようね、奥さん。証人はたくさんいるし」
不機嫌に曇る瞳が2組、喜びに輝く瞳も2組。

気になるのは不敵に微笑む瞳が2組あるって事実、かな？

「早希ちゃん、隆人君と渡り合うならもっと狡猾にならなくちゃ」
ぐる？歌織さんもぐるなの？

あたし、まんまと策に嵌ったのー？！

悪魔が二人になったら、エクソシストって呼べないもんかしら…？

浅はか、迂闊、浅慮、間抜け、考えなし……いくら自分を罵っても覆水盆に返らず。

はあ、ボキヤブラリーが少なすぎて、今の自分を表現する上手い言葉も見つけられやしない。

「結婚式は神式で和装、神社に予約も取れましたわ」

「こちらも披露宴をするホテルの手配と招待状の発送は終わりました。急なことでしたがお返事も大分頂きましたし、順調ですよ」

「ドレスは知り合いの店に、今日届けるよう言っておきました。早希ちゃんの希望がわからなかったからシンプルなものからお人形さんみたいなのまでたくさんあるわ。オーダーメイドは時間的に無理だったけれど、素敵なものと一緒に選びましょうね」

「よかったわね、早希。皆さんに手を尽くして頂いて、なんの心配もなくお嫁に行けるわね」

おば様も、お祖母ちゃんも、歌織さんも、お母さんまでひどく楽しそう。

バカなこと言っちゃったその日の夜に、あたしを送りがてら挨拶に訪れた近衛家ご一行様と風間家代表祖父母が起こした行動は正に電光石火。

翌日には招待状の発送が済んでたあたり、この人達いつ結婚が決まってもいいように準備してたに決まってる。

力なく抗議するあたしの声なんてそちのけで酒盛りしてた連中がだよ、500人から招待客のリストアップや印刷、宛名書きの手配をできるわきゃあない。いくら金持ってたって、できることとできないことが世の中には存在すんだから。

なんて無力、罨に落ちた野生動物の気分がここ1週間で堪能できた。

特にこの4人、揃えたとタチが悪くって、あたしが一言も発しないうちにいろいろ決めてくれちゃうわけよ。

白無垢も、くそ重たい十二単もお祖母ちゃんが着たものがあるって有無を言わず着用決定だからね。

ドレスだってホントにあたしが選べるのか大いなる疑問が残る。

いやまて、問題はそこじゃないぞ。最早当事者の意見なんか完全無視で、結婚が決まってることもそもそも間違ってるんじゃないのか？

「盛り上がってるところすみませんが、ちょっと早希さんをお借りしてもよろしいですか？」

開け放たれた襖から、ひょいっと顔を覗かせた近衛氏が際限ないおしゃべりを続ける女性陣に声をかけた。

ど平日だって言うのにさ、何故かこの男、朝から家にいんのよね。お祖父ちゃんと客間に籠もってよからぬ相談をしてたらしいけど、やっと婚約者にされたあたしの存在に気づいたらしい。

何せあの晩からこっち、二人で話した記憶が皆無なんだから、こいつ結婚するのは道行く野良猫でもいいんじゃないかと、真剣に思ってたくらいよ。

「あら、どうぞどうぞ。この子がいなくても私たちで決められますから」

そーでしようよ。ここに至るまであたしなんて床の間の掛け軸よりも存在感うすいんだからさ。

「10時には衣装を選ばなきゃならないから、それまでに2人でここに来てね」

「そうよ、女の子にとって花嫁衣装は一生の夢なんですからね。あなたはともかく、早希ちゃんだけは連れてくるのよ」

夢は迂闊な一言で、潰えたんですがね…。

感傷に浸ってるこっちのことなどお構いなしにあたしを立たせた近衛氏は、天使の微笑みを振りまきながら強力女性陣の元を後にし

た。

「早希、あの人達に1つでも希望を聞いてもらえた？」

離れへ続く長い廊下を進みつつ、困惑顔の近衛氏が聞いてくる。

「もらえるわけじゃないじゃない」

怒る気力さえなくして投げやりに言うのに、彼は吐息混じりに頷いた。

「そっちもか。僕の方もね仕事のスケジュールから、新婚旅行の行き先まで決まってた」

「：珍しい。近衛氏なら自分の意見押し通せそうなのに」

「家族にならどんな強気にも出れるけど、会長まで一緒になって手配済みだって言われてごらんよ。僕なんて子供と同じ扱いだよ」

さめざめと呟く、へこんでる彼つてのを初めて見ちゃった。

へえ、近衛氏にも苦手ってあるんだ。

いつものなら、ここぞとばかりに追い打ちかけたりからかったり、チャンスは逃さないんだけどさ、状況が状況だけに同病相憐れんじやう。お互い難儀な家族をもったものよね。

「ここは1つ、気が変わりましたって宣言するのはどうなの？」

2人とも迷惑こうむってんなら丁度いいじゃない。

そもそもスタートが悪いし。

期待を込めて見上げたのに、近衛氏はそれはダメってあっさり却下。

疲れ切ってた表情も、にこやかに復活してるから結婚取りやめる気だけはさらさらないって事らしい。

1度こっきりの人生、有効活用しようよお。

この期に及んでまだ破談を願う往生際の悪いあたしを、行き着いた離れの扉に押し込めた近衛氏は、後ろ手に襖を閉めると胸元からごそごそ紙を取り出した。

「お祭り騒ぎが続いていたからね、大事なものを忘れてた」

薄っぺらいそれ、見覚えがあるぞ。

燦然と広げられた婚姻届は、いつの間にか妻の署名捺印を残して空欄が全て埋められている。

証人欄にはおじ様とお父さんの名が、本来あたしが記入すべき住所だの本籍だのはお姉ちゃんの字が躍ってた。

みんな、楽しそうだね：人の不幸が。

どっと襲った疲労に畳に座り込んだあたしの隣、ほんの僅かの隙間を空けて近衛氏も腰を下ろす。

他に比べると狭いとは言え、10畳はある広い部屋でそんな密着する必要はなかうと睨みつけると、奴は不敵に笑って見せた。

「結婚しようっていうのに、照れても仕方ないでしょ？」

ああ、はいはい。もう好きなようにして頂戴。

どうせ勝てやしない相手に体力使うのもバカらしく、諦めてテーブルに置かれた婚姻届に向き直る。

書いてやるわよ、名前をね。判子は：ないから拇印押しちゃえ。お望みとあれば血判にしてやる！

やけくそでペンを取ろうと立ち上がりかけた右腕が、力任せに引き戻された。

バランス崩してみっともなく畳みにへばりついたあたしの顔を、いつになく真剣な近衛氏が覗き込んでいる。

「痛いなあ、書くモノ探しに行くだけでしょうが」

そんな必死に押さえつけなくても、逃げやしないわよ。

四つんばいの格好じゃ睨みつけても迫力に欠けるけど、至近距離の奴の顔に対抗するには気合い入れなきやすぐ負けちゃう。

黙ってるとやたら綺麗で、見とれたら最後無茶な要求も頷かせるだけの力が近衛氏の外観には備わってる。

見た目いいってのはそれだけで武器になるな。

「署名捺印はしてもらうんだけどね、その前にしなきゃいけないことがあるんだよ」

「なによ？」

「プロポーズと意思確認」

：ちよつとびっくり。こいつにそんな気の利いた真似ができるとは思わなかった。

だまし討ちみたいな結婚承諾で終わりじゃなかったのか。

限りなく普通じゃない結婚に、唯一残されたまともな手順。きちんと聞かなきゃ損だとばかり、あたしは居住まいを正した。

背筋を伸ばした正座で向き合う、好きな人。

意地悪だし、自分勝手だし、性格曲がってるし、数え上げればいいところより悪いところの方が印象深い目の前の男は、最近どころが良かったのか疑問を抱くことも多いんだけどどうっかり惚れ込んだ相手ではある。

意志に反して進められる結婚話も、次に発せられる言葉次第じゃ望んだ結果にも変わるってもんだ。

「僕と結婚してもらえますか？」

「……………それだけ？」

もっと他に好きだとか、一生一緒にいて下さいとか（歌の歌詞にあったな）、全力でお守りしますとか（ぱくりだ）気の利いたセリフは？

その言葉に先を期待をするのに、近衛氏は当惑顔で首をかしげる。

「これ以上何を言うの」

「いや、好きだとか愛してるとかないわけ？」

決まり切ったセリフでいいから、もう一押ししてよ。

「うーん、他の女性よりは好きだけど、これじゃ納得しないんですよ？」

こくりとあたしは頷いた。

近衛氏も期待を込めた視線を向けられるのに、じっと押し黙って

考え込んでいたんだけど、やがてゆつくりと口を開く。

「そもそも結婚しようって気になっただけ、僕としては早希を特別に見てるんだ。その前に決意した時はひどい目にあったからね、一生独身でいるのも悪くないと思ってた。でも会長からの話を貰ってその孫娘に会って、一筋縄じゃないかな君に興味を持った。兄さん達がおもしろ半分で早希に結婚を申し込めば腹がたつし、些細なことでめれば今までの行いが間違ってる気がして、自分を振り返る。以前の恋のように周りも見えないほどのぼせ上がりはしないけれど、君という時間が楽しくて仕方ない。ただ、怖くもあるんだ。早希はまだ若い、この先僕より好きな人が現れる可能性が大きいだろう？その時、婚約者の立場じゃ簡単に捨てられるけど、会社にも家にも深く入り込んだ夫なら切り捨てるのが難しい」

長い独白は、口元を歪めた悪魔スマイルで締めくくられた。

なによね、どこにも愛の告白はないのに、結婚してもいいような気になってきたじゃない。

「それ、取りようによっちゃ独占したいって聞こえるよ」

誰にも渡したくないなんて、クラリとする告白だと思わない？くすぐったい胸の内を隠すように、上目遣いで近衛氏を見やれば不敵な笑顔が近づいて、緩く回された腕の中に囲われる。

体のどこも触れ合っていないのに、相手の体温を感じる不思議な距離は彼が意図的に作り出した空間。

「僕は早希をこんな風に閉じこめたい。離れていても相手の存在を感じる、自由だけれど逃げ出すことはできない、その1つの方法が結婚だよ」

「あたしと恋する話は、どうなったのよ」

腕の中に閉じこめられるのも悪くはないけど、恋愛感情のない結婚なんて続けられない。

「そうだね、小さな炎、くらいかな。勢いよく燃え上がったりはし

ないけど、絶えることなくすぶり続ける」

「それ、恋の話なの？やけに抽象的だけど」

「恋であり愛、ってところ。始めて早希に会った頃は火種さえなかったんだから進歩だと思わない？」

くすくすと、自然に笑いが漏れだした。

丸め込まれてる気がする。近衛氏、結局肝心なこと、何1つ言っていないじゃない。

それでもいいかって？なんの感情も抱いてない相手を閉じこめたり、縛り付けたりはしないでしょ？

殺し文句だと思ってやるわよ。

「しょうがないから、結婚してあげる」

横柄に言ったあたしを、回された腕が強く抱きしめる。

「それはどうも」

さして感情のこもらない近衛氏の声がおかしくて、あたしは思わず噴き出した。

やることと、セリフがちぐはぐな男なんだから。

花嫁ってのんびりしてていいなあ。

神社の控え室での感想はこれ。

祖父母、両親、共に挨拶回りでいないし、お姉ちゃんも久しぶりに会う、田舎のお祖父ちゃん達の相手をしてるし。

ここに座つてると、一月続いた喧噪が現実とは思えない。

学校行つて、親戚への挨拶回りに引きずり回され、やれエステだ離れのリフォームだって気を休める暇もないくらい忙しかった。

その間近衛氏と2人きりになることはなくて、常に家族の誰が一緒にいて。

やっぱ、少し物足りなかったかな。せつかくその気になったんだしデートの1つもしたかったと言うか、ちょぴつとでいいから恋人の時間を楽しんでみたかったじゃない。

だって、今朝婚姻届を提出した時点で、あたし達は法的に夫婦でしょ？

恋人には2度となれないんだもん。なんか損した気がする。

普通の花嫁さんとはほど遠い、場違いな感傷に浸っていると、細く開いた窓からざわめく人達の声が運ばれてきた。

出席者控えの間と花嫁とを仕切るのは狭い中庭だけで、窓越しにこちらの様子が伺えないようきっちりブラインドが下ろされているから声だけ。

初夏の熱気が化粧を落とさないよう、がんがんにクーラーが効いていたけど、みんなが出て行くとき人の気配がないのは寂しいからと、少しだけ窓を開けてもらったのだ。

広い部屋でたった1人、静かでもいいと思っていたけどなんか心細くなってきたな。

これから、結婚するんだよね？

名字は変わらないけど、無条件に大人に甘えていた子供時代が終わっちゃう。お祖父ちゃん達と敷地は同じだけど、リフォームされた離れは完全に独立してて、2人だけで生活を始めるんだ。

……果てしなく不安。どうしよう、逃げ出したくなってきた……。

急に全身を襲った先の見えない恐怖に、息苦しいほど帯で締め付けられた体が冷たい汗で濡れていく。

周りでするさいくらいに騒がれて、目眩するほど忙しかった時にはこんな気持ちなかったのに、1人で考える時間をもらったらあれもこれも全部、自分には無理だと思えてくるんだから、不思議だ。

これって話に聞く、マリッジブルーってやつ？

頭でわかっていても膨らんでいく不安に押しつぶされそうで、あたしは壁に掛かったシンプルな時計で式の開始時間を確認していた。現在9時10分。お母さんが迎えに来るって言ったのは9時45分。

まだ、間に合う……。

邪魔な白無垢の裾をはしたなく持ち上げて、かつらで重い頭に四苦八苦しながら、あたしは発作的に控え室を抜け出していた。

当然、後先なんて考えずに。

「隆人さん、ちょっと」

早希を迎えに言ったはずの母親が、顔色をなくして花婿の元に駆け込んできたのは、10時の式まで後10分ほどとなった時だった。「何かあったんですか？」

社殿へ移動する列を抜け出した隆人は、近くの空き部屋に彼女を

引き込み、穏やかな口調で問う。

時間的にも、状況から見ても良くないことが起こったのは一目瞭然だ。

しかも間違いなく花嫁がらみだと言うことも。

だが、ここで彼が感情を露わにしては、ただでさえ取り乱している彼女を更に混乱させるだけ。

内心の動揺を映すことのないポーカーフェイスに感謝しつつ、隆人は静かに次の言葉を待った。

「早希が：早希がいないんです。控え室に迎えに行ったらもぬけの殻で、主人と有希が捜しているんですがお式に間に合うかどうか：」
狼狽して今にも泣き出しそうな母親の肩をそっと叩いて励ますと、隆人は素早く最善の策に思いを巡らせた。

（あの格好だから遠くに行くというのは考えづらいな、とすれば敷地内にいる。招待客にも少しの遅れであればなんともごまかしが利くし、僕が行っても誤魔化せる範囲なら、自分で行った方が見つけ出せる確率が高いな）

短い付き合いだが、それなりに彼女の行動パターンを理解できるようになったと自負していた彼はそんな風に結論づけて、先の母親に微笑んで見せた。

「お母さん、花嫁が緊張で貧血を起こしたと、会長に伝えてもらえませんか？僕も心配でついていると。後は何とかしてくれるはずですよ。その間に必ず見つけますから」

だから、安心して待っていて下さい。小さくそう付け加えると、隆人は社殿の裏に足早に向かう。

これまで不安の1つも口にしなかった早希を、彼はそれなりに心配してはいた。

表面上は姦しい女性陣の愚痴を言ったり、時間の無さを怒ってはいたが、会うたび霞んだように光りをなくす瞳は奥に闇を抱え込ん

でいくようで、それがいつ爆発するのか落ち着かない思いで眺めていたのだ。

（何とか時間を作って、話を聞いていれば）

気づいていたのに、忙しさにかまけて彼女を一人にした自分に責任がある。

しっかりしていても、早希はまだ16にしかないというのに。舌打ちしたくなる後悔を抱えて、隆人は消えた花嫁を捜すため、いつか全力で駆け出していた。

まずい、やらかしちゃった…。

狭い物置の隅にうずくまりながら、既にあたしは激しく後悔している。

逃げたって事態が好転するわけじゃなし、式はともかくこの後に待つ披露宴に至っちゃ、やたらめったら大量の客がひな壇に座る新郎新婦を祝おうと群れをなしてやってくるのだ。

その場に花嫁が不在じゃ家族に多大な迷惑がかかる。

わかってる、わかってるけど今更どうしたらいいのよ！

思うように歩けない体を引きずって隠れた先は、荷物の詰め込まれた小さな部屋。

パニックを起こしていたのが幸いして、タクシーで家に帰ろうとか、白無垢を脱ごうとか取り返しのつかない事態だけは引き起こしてないけれど、ドア一枚隔てた先から聞こえるお父さんやお姉ちゃんの必死の叫びは余計にあたしの体を動けなくした。

怖い…出て行ったら、あの不安の中で一生を過ごさなきゃいけない。

どんな泣き言を言ったところで、見つければ否応なく祭殿に引っ

張り出される。それはいや、考えただけで胃が引きつつちゃう。かといって、逃げ続けることに解決なんかないって言うのだって、わかってる。

だからこそ起こるジレンマ。迷惑をかけて申し訳ない気持ちと、グルグルしてる不安と。

恐怖と動揺で頬に涙が流れた時、呼び声の中に近衛氏の声が微かに混じった。

「早希、どこにいるの？」

くぐもった呼びかけが、奥からドアを一枚ずつ開けて、確実にあたしの元へ近づいてる。

当事者が2人ともいなくて大丈夫？ いや、そんなことより見つかったら怒られる？

体をできる限り縮めて壁に張り付きながら、再びパニックを起こしたあたしは、襲いくるその時に備えて息をひそめた。

見ツケテ。見ツケナイデ。ドウカ、お願い。

「早希？」

不意に鮮度を増した声が、頭上に響いた。

緊張で扉が開く音にさえ気づけなかったのに、伏せた顔に覆い被さる近衛氏の温度だけは、全身が感じて。

「こんなところに、いたんだね」

純粹な安堵だけを滲ませて回された彼の腕があたしを包み、恐怖に強ばった体をゆっくりと溶かしていく。

「ひとりぼっちにしてごめん。怖くなっちゃったんだよね」

言い当てられた本心に、緩んだ涙腺を止める術はなくて、ついには子供の様に大声を上げて泣きじゃくってしまった。

「大丈夫、大丈夫だよ」

優しく背を撫でる手に全てをゆだねて、不安を涙に替えて泣き続けるあたしを近衛氏はひたすらに慰めている。

泣いて泣いて、お化粧が取れちゃうのも忘れて泣き叫んだあたしは、やがて耳元で囁かれる言葉に意識を奪われていった。

「早希の不安はわかっていたのに、話を聞いてあげられなくて、ごめん」

違う、自分の心が追いつめられてるなんて思いもしなかったあたしのミス。

「話せる時間はあったのに、1人で君を騒ぎの中に取り残した」

そんな余裕2人ともなかった。近衛氏だって大変だったんだもん。「今日だって、客なんて放ってでも、君に会いに行けたのに」

できるわけじゃない、自分達の為に集まってくれた人達なのに。

「本当に、ごめんね。この先はずっと一緒にいるよ。式の間もその後も、絶対1人にはさせないから」

「…ホントに？」

枯れてしまった声で問いかけると、抱きしめる腕に強い力が込められた。

ぼろぼろであろう顔を上げると、近衛氏の瞳が驚くほど柔らかな光りをたたえてあたしの視線を絡め取る。

「一生一人にしない？怖い時はずっと側にいてくれる？」

今日だけの事じゃないの、長い人生必ず待ってる不安な時間、必ず一緒にいてくれる？

言葉にできない思いを見透かしたように、近衛氏が世にも貴重な天使の微笑みをくれた。

「約束する。どんなときでも手を伸ばせば僕がいるから」

どうしても消せなかった大きな胸のつかえが、その瞬間溶けてなくなった気がした。

そうだよ、ちょっと待ってればよかったんだ。

祭殿に行けば近衛氏がいる、これからずっと一緒にこの人がいて

くれる。

なんでそんな簡単なこと、思い出せずにいたんだろう。
あたし、1人じゃないのに。

「大騒ぎして、バカみたい」

愚かな行動の顛末が、笑っちゃうくらいお粗末なんて…あたし、
救えないわね。

「安心できたなら、祭殿に行けるかな？」

のんびりとした近衛氏の声に、はたと思い出した今の状況はそんな悠長なものじゃなくて。

「ちょっと、いちゃいちゃするのは後にしなさいよ！もう予定時間から20分も過ぎてんのよ！！」

戸口に陣取ったお姉ちゃんとお父さんが、鬼の形相でこっちを睨んでた。

ひーっ！どうしよう？

「ここまで遅れたら、慌てても仕方ないよ」

慌てろよ！…いや、あたしのせいだけどさ…。

崩れた化粧を美容師さんの神業で直してもらって、祭殿に近衛氏と入ったのはそれから5分と立たないうち。

波乱含みの結婚生活第一歩だな…。もう逃げやしないけどね。

25 (後書き)

ここで一部は終わります。

少々時間をいただいて、二部を始めます。
お付き合いありがとうございました。

改築された離れは、メゾネットタイプのアパートのようになっていた。

1階に簡易キッチンとリビング、近衛氏の小さな書斎。

2階に寝室とバスルーム、あたしの勉強部屋。

外観は和風、内装は洋風なんておかしい建物ができちゃったのはひとえに母屋とのバランスの関係で、言わせてもらえばこのお家、あたしの意見なんて欠片も採用されちゃいない。

周りの大人が寄り集まって勝手にリフォームしやがったのよ、家具一つに至るまで相談なしにね！

だから、ベルサイユ宮殿の部屋みたいな内装に落ち着かないしなにより：

「立派なベッドだね」

寝室の入り口で立ちつくすあたしの背後から、のほほんとした声を発したのは、数時間前に結婚したばかりの配偶者。

取り柄は顔の良さ、欠点はそれを補って余りある性格の破綻ぶり。不覚にも式寸前で逃げ出したあたしは、頼もしいダーリンの言葉で滞りなく披露宴まで済ましたんだけど、今この現状を激しく後悔してるところよ。

よく、考えるんだった。

結婚したらすることしないといけないうてのはわかってたけど、意識的に頭の中から追っ払ってたし、いきなり天蓋付きのメルヘンチックな代物に現実突きつけられるとは思ひもなかったんだもん。

「一緒には寝ないからね」

ぐるりと振り返りこれ見よがしのバカでかいベッドを指さして、

声高に宣言するのは、悪あがき。それを無視して部屋中を物色した近衛氏は、理解できないとばかりに表情を歪めてる。

「新婚一日目で、家庭内別居？」

「それ以前でしようが！キスもしてないのに、いきなりベッドインかい！！」

そもそもこんな事態になったのはあんたの罠にはめられたからなのよ、わかってる？

歯ざしりする思いで睨みつけたのに、ポンと手を打つ芝居くさい仕草をした近衛氏は、にっこり笑ってのたまったとき。

「全部一度に片づけちゃえば、時間短縮になるよ」

「そう言う問題か、このドあほ！！」

「夫にドあほ：もう少しいたわりを」

「持てるか！」

ぜいぜいぜい…。

酸欠になりそうだわ：真面目に話してるつもりなのに、どうしてこうふざけた展開になっちゃうのよ。

だいたい新婚初夜に怒鳴りあう夫婦なんて聞いたことない。まあ、甘ったるいムードになっても困るんだけどさ…。

きつく据えた視線をもとめせず、困り顔の近衛氏が一步距離を縮めた時、あたしは反射的に部屋の外に飛び出した。

「早希？」

当然背後から迫る気配はこっちが逃げる倍のスピードで近づいてくるんだから、安全な隠れ場所を物色してる暇はない。

1番近くて、尚かつ閉じこめれるのは隣のバスルーム！

走りにくいったらないヒラヒラしたスカートを捲り上げて、駆け込んだ冷たいタイル張りの浴室は、悲しいことに鍵が無かった。

なのであの連中はプライベートって言葉を解さないかな。入浴中

誰かに覗かれる心配はしないのか！

：しないか。同居人は夫だった…。

それでも幸いなことに、内開きの扉は、背中をつけて座り込めば外敵の侵入を阻止する手助けくらいにはなる。

両足を踏ん張って全体重をドアに預けたあたしは、大きく安堵の息をついた。

「出ておいで、結婚式まで済ませた人が、何怖じ気づいているんだい」

ノックの音を響かせて、多分に笑いを含んだ近衛氏の声が真っ暗な部屋にこだまする。

さすが紳士を気取るだけあって、無理に押し入ることはしないと。偉いぞ。

しかーし、怖じ気づくとは聞き捨てならん！

「ちょっと、勘違いしないでよ。近衛氏なんて全然怖くないんだからね！」

「それなら出てきたらいい。怯えたウサギみたいに閉じこもらないで」

ウサギ…可愛い例えだけどなんだそれ。ここは穴か、穴倉なのかっ。

「あたしが逃げたのは近衛氏が話を聞きそうになかったからでしょ。力ずくでベッドに引っ張り込まれるのはごめんだもん」

そうそう、これが理由だったわ…て忘れちゃダメじゃん。恐怖で頭が真っ白だった…なんて絶対無い。きっぱり断言するぞ。

「話をしようと思って近づいたら、逃げたくせに」

「嘘！捕まえるために近づいたんでしょ」

「そのつもりがあったら、もっと素早く動いてるよ」

「いんや、信じないね」

何度騙されたと思ってんのよ、あたしにだって学習機能くらいついてるんだい。

長期戦覚悟で言い切って、沈黙すること数分。

「…わかった。今晚はそこで眠るといい」

諦めた声の後、近衛氏は随分あっさり引き下がった。

そっと扉に耳をつけて向こうの様子を窺っても、人の気配はしなくって。

遠ざかるスリッパの音が聞こえてくるだけって、本当にここで朝迎えろってんじゃないでしょうね？ いや、出ないつつたのはあたしだけどさ、それにしても冷たいじゃん。もっとこう力入れて説得してみるとか、自分に下心なんて無いとアピってみるとかさあ…ともかく、もっとがんばりなってば！

わがままにもあたしは、近衛氏があんまりあっさりしてるんで、今度はさびしくなっちゃったのだ。

真っ暗いバスルームが急に温度を下げた気がして、取り残された心細さに思わず体を抱いてしまう。

それじゃ電気でもつけりゃいいんだろうけど、ドアから離れるのは怖いんだから質が悪い。

こっそり戻ってきた近衛氏が、チャンスとばかり押し入ったどうするのよ。みたいな、有り得ない妄想までしてみたり。

「…おーい、行っちゃったの？」

そのわりにちっちゃな声で呼びかけてみたりはするのだ。返事無いか…なんて調子いいこと考えてるんだから、我ながら姑息。

「ここにいろよ」

「ぎゃあ！」

不意に横手から差し込んだ目映い光りと人影に、あたしは情けない叫びを上げた。

どこから入ってきたの？ 壁に穴でも開けたわけ？

「ひどい顔」

ビビりまくって歪んだ顔形なんて、気にしてられるか！つか、笑うな、ムカツク！

「ど、ど、ど、…」

「母さんに設計させたでしょ？あの人欧米スタイル好きだからね、部屋からバスルームに直通の扉がついてたんだよ」

パニック起こしてまともにしゃべれないあたしなんてお構いなしの男は、へたり込んでる体を軽々抱き上げると眩しい寝室へ運び出す。

「落ち着いて、僕の話を聞こうね？」

首をかしげて微笑む近衛氏は、ノーと言わせない迫力でベッドに降ろしたあたしを見つめてた。

出た：悪魔スマイル。ここ最近会ってなかったからとんとご無沙汰よねえ：じゃない！

ピーンチ、早希ちゃん久々大ピーンチ！

「あの人達のことだから、この家に眠る場所は一つしか用意されていない。早希が嫌がるなら僕は絶対に襲ったりしないから、おとなしくここで寝て。風邪ひいちゃうからね。いい？」

：ここは、信じていいとこなんでしょうか？

いつになく真剣な顔してるけど、騙されるのがあたしの日常だしなあ。でも他に寝るとこないのはホントだろうし、母屋へ行ってもお祖父ちゃん達に心配かけるだけだし：うーん。

「まじ、襲わない？」

上目遣いで怖々聞いてみると、疲れた笑顔の近衛氏が頷いた。

「もう騙さないから、いい加減信用して。当分は早希と結婚できただけでよしとするよ」

どんな嘘も見逃すまいとじーっと観察してたけど、あたしの足りない経験から割り出しても彼は真実を述べてる、と思う、たぶん。

顔、真剣だし。口調もふざけてないし。なにより、目がね、からかってないもの。

「わかった。信用する」

体の力を抜いて、柔らかなベッドに沈み込んで、あたしはようやく緊張を解くと、覗き込んでる近衛氏に軽く手を振った。

「うん。あ、でもこれくらいは許して？」

唇をかすめ取られたと自覚できたのは、バスルームの扉が小さな音をたてた時。

止める間も、叫ぶ間もなくもたらされたファーストキスは、意外にも胸の内にどんな感情ももたらさなかった。

あ、こんなもんか？ってところ。

突然すぎてドキドキする暇もない、近衛氏のドアップを間近で見ただけで覚えることなく、変だな。

「ま、いいか」

1度気を緩めちゃったせいか、痺れるように力の抜けた指先で布団をたぐり寄せたあたしは、お風呂は明日の朝に先送りして深い眠りに落ちていった。

いや待て、ホントにいいのか自分…？

目覚めれば近衛氏の姿はなく：正直助かった。

えーえー、慣れませんか、全然慣れないわよ、慣れてたまるかっての。

そもそも一緒に暮らすのも、隣で眠るのも慣れる以前の問題じゃないのさ。

愛の告白もプロポーズもろくになくてどうして夫婦になれようか、イヤなれない。

反語。

：って、古典の復習しても理解不能のメールが消えてなくなるわけではないやね。

『アニーローザに6時までに来るように』

画面に並んだ数少ない文字は、無愛想なまでに用件しか伝えてこない。そこに至る経緯とか、もっと碎けて言うなら理由ですよ、理由。なんで私が洋服屋にですね、行かなきゃなんないのかちゃんと説明しなさいってのよ。

そう、『アニーローザ』とは近衛氏に強制連行され、彼好みの服を山と買わされた店である。

1番最後に寄ったところで、店員さんがあたしをバカにしない親切な人ばっかだったから、行くこと自体はいいんだけども。も、だ。充分衣服が足りてる現状で、なんでそんなところに呼び出されなきゃなんないの？まさか、またよからぬこと企んでるんじゃない？例えばこっそり堅苦しいパーティーに連れて行こうだとか、過度に着飾らせて笑いのにしようだとか。

万が一にもそんな魂胆だってなら、ブチってやる！

と言う叫びを、まんまメールしてやったあたしに、返された反応は無視。

2時間目終了時に入ってた携帯の着信に、速攻返信してからかれこれ8時間なしのつぶてとはいいい根性してんじゃないの。覚えときなさいよ！

：ま、その間、一時間おきに同じ内容送り続けたあたしのメールも、ちよつとスパム入ってるけど。

「挙げ句遅刻とは：殴ってやる」

でも、素直なあたしは指定場所に来ちゃうんだな。ちよつぱり警戒してる証拠に、お外でガラス越しに店内を覗く用心深さなんかみせつつね。

「どちらにしても中に入られた方がいいんじゃないですか？不審人物みたいですよ」

しかし、この無様な姿に平沢さんは冷静なつつこみを入れる。

来いと言われても場所すらうる覚えのあたしの元に、近衛氏が用意周到に送り込んでくれたこの運転手は、あたしが外面の良い悪魔を恐れていることを知ってるくせに、どっちの味方なんだか。

「だって近衛氏といきなり鉢合わせしたら、怖いじゃないですか。

ついでにここ、一人で入るにはちよつと敷居が高いんです」

ふくれっ面で言い返すと、再び綺麗にディスプレイされた店内を再び覗き込む。

「何言ってるんですか、お嬢様のくせに：」

呆れ声の平沢さんの呟きは、ガン無視でだ。

この人は俄お嬢様の憐れというものを、全く理解してない。どんなに着飾ろうと庶民感覚にどっぷり浸かってる人間は、どっかでぼろが出るんじゃないか、いやもしかしたら既になにかやらかしてるんじゃないだろうか、被害妄想に取り憑かれるもんなんである。

なにしろ俄。どうしたって俄。バックボーンのない薄っぺらな人

間性は隠しようがない。経験値の足りなさを補うアイテムは、どこ
の店でも売ってない。

だから普通の高校生が買い物する店よりゼロがいくつ多いここ
は、あたしにとって怖い場所なのだ。

店員さんだって、前はバーゲン品の服を着ていたあたしにも優
しかったけど、それって近衛氏がいたからかもしれない。もし1人
でなんか入っていったら：いやいや、待って。もしや入店拒否とか、
されちゃう？

臆病風に吹かれて更に及び腰になったあたしは、会いたくないは
ずの近衛氏に早く来いとか願っちゃうほど、小心者だった。

「営業妨害よ、お嬢ちゃん」

なので、いきなり背後からこんな風に声をかけちゃいけません。
びっくりして体が跳ね上がったじゃないですか！危うく悲鳴を上げ
るところだったじゃないですか！

躍る心臓を宥め賺して恐る恐る振り向けば、そこには口角をつり
上げた可愛いお姉さんが風貌に似合わない冷たい瞳であたし達
を見ていて、あからさまな侮蔑を浮かべるその表情に、温厚なあた
しもうっかりキレそうになってしまった。

「…すいません」

ひっじょーに不本意ながら、己の行動のみっともなさには自覚して
いたあたしは素直にガラスから離れる。

「分不相応な服装をしても、みっともないだけよ。だいたいあなた
のおこづかいでこの店の服が買えるわけないでしょ？」

ウェーブのかかった髪を後ろに払いのける芝居がかった仕草の後
ずっと目を細めた彼女は、ベビーピンクのスーツが泣き出す、感じ
の悪さを全身に纏って鼻で笑いやがった。

小さな顔に並んだ大きな瞳も、綺麗な弧を書く唇も、そりゃあ可
愛らしい小柄な女性に殺意を覚えたのは生まれて初めて。

この人、誰？なあんでわざわざ初対面の人間にケンカ売るかな。性格、悪っ！

相手がお人形さんの美貌を誇るおねえさんでも、売られたケンカを買わずにいられるほど、あたしゃできた人間じゃない。

当然、きっちり買う。後ろで平沢さんがちよっと狼狽してようと、構わず買う！

「あなたに着られるなら、あたしにも当然着られる気がするんですがね」

言い返してみやがれ、性悪女！ってなもんよ。

そりゃあ、自分がこの店のレベルに合った客だとは思わないけど、通りすがりの人間に似合わないだの、買えるほどお金もっていないだろうだの、言われる覚えはない。

で、どうでるのかなとちろっと視線をやると、眉をつり上げて一瞬鬼の形相を覗かせた女は、底光りする目であたしを睨みつけた。

「言うじゃない。値札見て冷や汗かいても遅いわよ」

伸ばした爪が腕に食い込む痛さを抗議する前に、あたしは店内に引き入れられる。

「早希さん?!」

後ろからオロオロついてくる平沢さんに、大丈夫と微笑むのに被るよう一斉に降りかかる歓迎の声。

「いらっしやいませ、鈴原様」

進み出た店長さんに（この前紹介されたから覚えてる）打って変わったお上品な笑顔を返すと、くそ女はあたしをぐいっと前に突きだした。

痛いな、腕に爪の穴空いたら、どうしてくれんだ！

「このお嬢さんがお洋服を欲しいんですって。見立ててあげて下さらない？」

本音を隠した猫撫で声に悪寒が走っちゃったじゃないか……。二重人格、近衛氏なんて足下にも及ばない立派な二枚舌。金持ちの建前は、庶民には理解できんわ。

「まあ、ありがとうございます。どんなものをお望みですか？」

どうしたものかと顔をひきつらせるあたしを覗き込んだ店長さんは、不意に動きを止めるとパンと両手を胸の前で打ち合わせた。そりやもう、至近距離にいたあたしがギョツとするくらい、大きな音を出してね。

な、何？　どうかしたの？　なんでそんなみつけたっ！　みたいな顔してんの？

「お待ちしてたんですよ！　遅いからお電話差し上げようかと思っていたところですよ。さ、あちらでお召し替えなさって下さい。もうすぐお迎えにいらしてしまいですよ」

「や、あ、あの？」

「急いで。ヘアメイクもするお約束なんです」

にこやかに、しかし抵抗を許さない断固たる態度でフィッティングルームにあたしを追い立てようとした店長に、代わりに質問してくれたのは背後で立ちつくすあの女だった。

「こちらでお約束があるお嬢さんだったの？」

声に動揺が見え隠れするのは、優位にいたはずの自分が窮地に陥っていることに気がついたが故なんだろうな。

ほれみろ、人は見かけによらないんだ。先入観で決めつけるからそんな目にあうんだぞ。

……って、あたしの方が引っ立てられる罪人みたいじゃ、言っても様にならないけど。もしくは引っ捕らえられた宇宙人？　両側にいるのはトレンチの男じゃなく、綺麗なお姉さん方だけだ。

「はい、近衛様がお食事にお連れになるのに相応しい服装をとお望みです。無頓着なお嬢様で放っておくと着飾ったりなさらないそうですねです」

無頓着…いい表現ね。まさかつい最近までバリバリの庶民だから、普段着がジャージとは言えまい。

近衛氏、お祖父ちゃんちでそんなあたしを見ても眉1つ動かさなかったから、気にしてないんだと思ってたけど、もしやジャージは嫌いだった？…好きな訳ないか、あの人が。

いや、そんなことよりも食事に行くんだったのか。それならこの前のワンピースでいいじゃん。もったいない、ああ、お金持ちの発想ってもったいない！

なんて、ひとりで楽しいループ思考をぐるぐるしていると、ピンク女の訝しむ声が聞こえてきた。

「近衛…大嗣さん？」

店長さんの懇切丁寧な解説は無視して、彼女が気に留めたのは近衛の名前だったらしい。

あたしのことは、スルーなワケね。ま、いいけど、なんで大嗣兄ちゃん？この人も群がるお嬢さん方の一人？

何か兄ちゃんが女性に対して妙な偏見持つてる理由を垣間見た気がする。あたしもこんなのがうじゃうじゃいるんじゃないかな。

心持ち血の気の引いた顔で、店員さんの返事を待ってたピンク女は、

「いえ、隆人様です」

首を振った店員さんにあからさまなまでにほっとして、そんてちよこつと驚いた顔でこつちを向いた。

「隆人さんのお付き合ひしてる方だったの？」

おお、近衛氏までチェック済みとは。これは将彦さんも知ってるな。

一体誰狙いなんだと、警戒して黙っていると気を利かせてこの質問にも店員さんが答えてくれた。

「昨日ご結婚なさったと伺いましたよ。今日はお祝いのお食事に行かれるそうです」

「結婚……？ あら、まあ。三男と結婚してもいいことはないんじゃないかな
いかしら？」

嘲る声に、なんか頭んなかでかちりと嵌る物がある。

三男、ですか。確か近衛氏の元カノはそれを理由に彼を振ったと
伺った気がしますよ？ おやおや？

「……隆人さんは家に養子に來たから、近衛家の財産はいらないん
です」

もしこの人が噂の彼女なら、ちょっとばかり苦労させられた恨み
もあるし、普段は余計なものにしか思えない家の名前を使ってみる
のもいいかもしれない。

近衛氏の心の傷と、あたしの紆余曲折分の恨みを込めて彼女を睨
み返すのに、人バカにした瞳から意地悪な光りが消えることはなか
った。

更に倍増？ 高笑いされたし。

「そうね、三男なんてそれくらいの使い道しかないものね。それで
あなたのお家には、彼を養子にしてまで守らなければならない、立
派な家名がありなのかしら？」

ここでね、キレちゃった。そろもう見事に、リミッターがぷつん
と。さっきの比じゃないレベルで。

言うに事欠いて使い道とは何だ！ 長男だろうが三男だろうが、人
間性を問うのに生まれた順が関係あるわけじゃないじゃない。この人は
男の顔が札幌に見えてんじゃないだろうか。

怒鳴りつけたいのは山々だけど、この勝負取り乱したら負けな気
がするから、できるだけ静かにあたしは言葉を紡いだ。

「祖父母はそう思っているみたいですけど、あたしはよく知りませ
ん。だからあなたが判断して下さい。風間の家と会社は金持ち社会
でどの程度の位置づけにいるんですかね？」

「風間：まさか、あなた風間純一郎の血縁なの？」

「純一郎は祖父です」

見る見る赤く染まる彼女の顔が、家が結構なお家柄だと教えてくれた。

これまで迷惑しか被ったことのない名前が、これ程の攻撃力を持つとは知らなかった。

ありがとう、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん。今初めて風間の名前が役に立ったよ！

「で、人の家や夫に偉そうにけちつけるあなたは、誰なんですか？これまでの仕返しとばかり、黙り込んだ彼女に上から目線で問う。自分でもイヤになるくらい感じ悪く、かつ高慢に。

実のところ、ほとんど100%の確率で、この人の正体に見当はついてるんだけどね。一応ほら、確認しておきたいじゃない。

「鈴原ひかるよ」

悔しそうに唇を噛んで、そっぽを向きながらの自己紹介を受けたあたしは、ここで大きなミスに気付いた。

元カノの名前知らんのに、彼女の名前聞いたってどうにもなんないじゃん。

多分、いやきつと、あたしのカンは間違っていないと思うんだけどなあ…どうなんだろう？

親切などなたか、教えて？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6299v/>

逃げ道はひとつじゃない

2011年11月4日10時11分発行